

## 1972年日本復帰後の尖閣諸島をめぐる沖縄県の動き

— 沖縄県の漁場利用調整対策会議と尖閣諸島周辺漁場調査について —



元沖縄県水産試験場主任研究員 <sup>ともり あきのすけ</sup> 友利 昭之助

1943年(昭和18年) 宮古島市に生まれる。75歳(2018年時)。  
1965年(昭和40年) 長崎大学水産学部卒業  
1966年(昭和41年) 琉球水産研究所入所、研究員、主任研究員  
1988年(昭和63年) 沖縄県水産試験場次長、  
1996年(平成8年) 沖縄県水産振興課長、農林水産部次長を経、  
2006年(平成17年)～2012年(平成24年) (財)沖縄県水産公社理事長

### はじめに

台湾北部海域から尖閣諸島海域は、カツオ、マグロ等の好漁場であり、先島及び沖縄の漁業者に活用され、各種漁業の漁場として利用されてきた。

戦前の1920年～1940年代沖縄県水産試験場が主にカツオ漁場調査を実施し、戦後は琉球水産研究所の名称でマグロ延縄、深海一本釣等の漁場調査を実施してきた。

1972年米国の施政権下から沖縄が本土復帰し、名称が沖縄県水産試験場となったが、漁業調査船“函南丸”の船名を引継いでおり、現在は戦後三代目である。

そして1970年代、尖閣諸島海域は激動の時代に入った。1968年国連アジア極東経済委員会が“尖閣諸島海域に海底石油資源が埋蔵されている”と報告。これを受けて、台湾中国が尖閣諸島の領有権ありと主張。風雲急を告げる尖閣諸島海域“波高し”となった。

そして1978年武装した中国漁船団が大挙して尖閣海域に出現し、底引網漁業を強行している。この事件は沖縄県内の漁業者は強い危機感を持ち、尖閣の漁業を守るべく漁民大会を開催、日本政府及び関係機関等に抗議の声を上げ、要請活動を行った。

他方、1970代は国際的に見ると、カラカス国際法会議(1974年)において、200海里、排他的経済水域設定問題が取り沙汰されたように世界的転換期の時代に突入していた。

海洋は、漁業資源、鉱物資源問題にとどまらず、世界戦略、安全保障上の観点から総合的に判断すべき問題であると、日本水産資源保護協会久宗高氏はいみじくも指摘している。

尖閣問題においても然りであるが、この観点からは筆者の力の及ぶところでない。

1972年日本復帰後における尖閣諸島をめぐる沖縄県は様々な動きをしている。

その中に1978年尖閣諸島についての漁場調整会議と1981年沖縄県尖閣諸島周辺漁場調査がある。筆者は、前者は県水試の一員で、後者は県水産課から世話係として参加させて頂き思い出深いものがある。この2つについて触れて見たい。

## 1970～80年代における尖閣諸島をめぐる動き

- 1968年 尖閣諸島海域に石油埋蔵資源ありと国連アジア極東経済委員会が報告
- 1970年 台湾が大陸棚条約に基づき尖閣諸島領有権を主張、琉球政府 尖閣領有を表明
- 1971年 台湾、香港、中国が尖閣諸島領有権主張
- 1972年 沖縄本土復帰、日中国交回復、周恩来発言、米中接近
- 1973年 オイルショック、第四次中東戦争、(1978年再価格暴騰)
- 1974年 カラカス国際海洋法会議
- 1976年 日本海に北朝鮮と中間線設定、旧ソ連 200海里設定
- 1977年 米国 200海里設定、日本 200海里漁業専管水域設定
- 1978年 “鄧小平談話” 尖閣領有権問題は“次の世代が良い方法を探すだろう” 棚上げし現状維持とする暗黙の了解
- 4月12日 中国武装漁船団、尖閣海域に領海侵犯
- 4月20日 “尖閣守れ”の沖縄県漁民大会 4月24日中国漁船団退去
- 11月17日 沖縄県漁場利用調整対策会議
- 1981年 沖縄県による尖閣諸島周辺漁場調査

## 戦後の日本漁業 海外漁場に進出 右肩上がりに 漁獲量増加

戦後の日本は経済復興にまい進し高度成長期にあった。水産分野でも、沿岸から沖合へ、そして遠洋への国策のもとに1960年代には、全世界の海洋に進出し、海外漁場における日本の漁獲量は右肩上がりに増加していた。遠洋マグロ延縄、遠洋カツオ一本釣り、ベーリング海の母船式底引き網、アフリカ、南米沖の南方トロール等である。

他方、沖縄においては、1960～1970年代の海外漁場は、遠洋マグロ延縄があげられる。本土の中古船を購入し、大臣許可指定漁業であるため関係当局の交渉により許可屯数枠を琉球政府は日本政府から獲得し、急成長を遂げ、マグロは砂糖、パインに次ぐ琉球の輸出産品であった。漁場は西部太平洋、インドネシア海域であったが、1962年琉球のマグロ船がインドネシア海軍からセレベス海で銃撃をうけ、死傷者を出すに至った。船舶旗が日の丸ではなく、米国民政府が定めた琉球船舶旗が認識されず、国籍不明であったとインドネシア側は弁明している。米国施政権下に起きた悲劇の一つである。

また、カツオ一本釣り船がパプア・ニューギニア、ソロモン諸島、パラオ等に出漁している、いわゆる南洋基地カツオ漁である。日系、米国の現地法人企業による母船式操業で、沖縄船は売魚契約であった。大部分が宮古の伊良部、池間の漁船であるが、大漁続きで、1978年には5万ト余りの水揚げがあり、その時期前後の数年間、地元が好景気に沸いたことは今でも語り草になっている。

## 国連海洋法会議で200海里枠組み 対応遅れた日本

当時は沿岸3海里から外の海の水産資源は早い者勝ちの獲り放題であったため、沿岸国、

とくに途上国からの不満の声があがるようになった。

先進国に対抗する漁獲能力を持たない途上国が、漁場を確保するために、排他的に利用できる漁業水域を拡げたいとする動きが出てきた。

1960年第二次国連海洋法会議において、領海の拡大を主張する沿岸国と公海漁場の維持を目ざす日本など遠洋漁業国と対立した。そこで米、カナダが中心となって、領海6海里、その外側に6海里の折衷案が出され、多く国々の支持を得たが、日本のみ反対し、廃案となった。1973年第三次国連海洋法会議において、議論の末、200海里の排他的経済水域の枠組みが確立されている。このことは国際的潮流の背景に資源ナショナリズムに立つ沿岸国の主張はもはや動かし難いものとなったと主張している。

そして1974年のカラカス国際法会議である。この会議の意味するものが何であったか？あまりに水産のみの視角から見ていたので、会議の本質を見誤ったのではないかと懸念し、久宗高（日本水産資源保護協会）が昭和59年水産工学研究推進会議で講演し次のように述べている。



これはなにも、水産関係者に限られたことではなく、わが国では一般に、海洋法の問題は、「あゝあの200海里の問題、即ち水産問題か」と受け取られているかの如くだが、実は「さかな」はむしろさしみのツマで、本命は、超大国の関心事、即ち軍事、海底油田、マンガン団塊等希少資源等、世界企業との利害が真正面からぶつかり合う局面なのである。即ち200海里問題は、世界戦略、軍事的観点から、海域通過に重大関心を持つ超大国と、資源確保に固執する第三世界との間にできた妥協の産物であって、路線とか安全保障とかいう重大問題に深いかかわりを持って総合的に判断すべきであるのに、それらを専ら「水産」の立場からのみ頑なに反対した日本は、この会議の性格、歴史的意義をわきまえぬ“例外唯一の国”——エクセプト・ワンと揶揄されたのである。

ともあれ、グローチェース以来、数世紀に亘って公理として通用してきた「公海自由の原則」が、音をたてて崩れ去ったことに、いかに大なる歴史に遭遇しているかがうかがわれる。そしてこの200海里問題の大勢が、第三世界のイニシアチブで決まったことで、第三世界の地位は著しく強化され、超大国も代償を提供することを余儀なくされ、その恣意を貫くことが出来にくくなった。

日本は200海里問題を“水産”プロパーの問題と錯覚し、対応が遅れたところに悲劇があると述べている。

## 1、水産庁、国内漁場の資源調査に本腰、各県水試へ調査委託

### 200 海里水域内漁業資源総合調査で、操業、水揚げ実態を把握

1977 年日本が 200 海里漁業専管水域を設定することに伴い、水産庁は北海道海区、東北海区、東海区、南西海区、西海区のそれぞれの海区における重要魚種について、各県の水産試験場に資源調査を委託することになった。

水産庁の指針計画の説明会が急遽開催されることになり、会議出席の件を当時の崎山憲一場長にお伺いしたところ、“沖縄海区は国境の海区であり、台湾中国に接している複雑な問題が予想される。水産行政担当部局と計画を調整検討すること”の指示を受けた。

南西海区は和歌山～鹿児島～沖縄の太平洋側である。対象魚種はイワシ、アジ、サバであり、沖縄の沿岸沖合漁業の漁獲対象魚種でないため、調査対象種、漁業は、沖縄水試の計画案のとおり了解していただき実施することになった。

なお、調査は資源評価を行い、資源管理を行うのに必要な漁獲統計、生物情報等を収集することを目的としている。

調査の内容は、①漁獲量調査、②生物測定調査、③標本船調査である。

#### ①、漁獲量調査

調査対象の魚種、漁業は、曳き縄漁業のカツオ、マグロ、カジキ。深海一本釣りの赤マチ、シチューマチ等。小型巻網のミジユン、ガツン、グルクマである。これら魚種にトビイカ、白イカを加えた。

#### ②、生物測定

現地から漁獲物の一部を送付してもらい水試内で行った。

#### ③、標本船調査

特定の漁業者に、出漁日毎の操業の位置、漁獲物を記録するものである。

また、県漁連、那覇地区漁協、糸満漁協のセリ帳よりマチ類、ハタ類、イカ類の水揚げ量を調査した。

### 尖閣諸島の標本船 宮古漁業者 主に曳縄で 浮魚を調査

標本船調査はかなり面倒である。漁業者が厳しい海上労働のあとで、出漁日毎の操業の位置、漁獲物を記帳することになり、調査依頼が可能か当初懸念したものである。

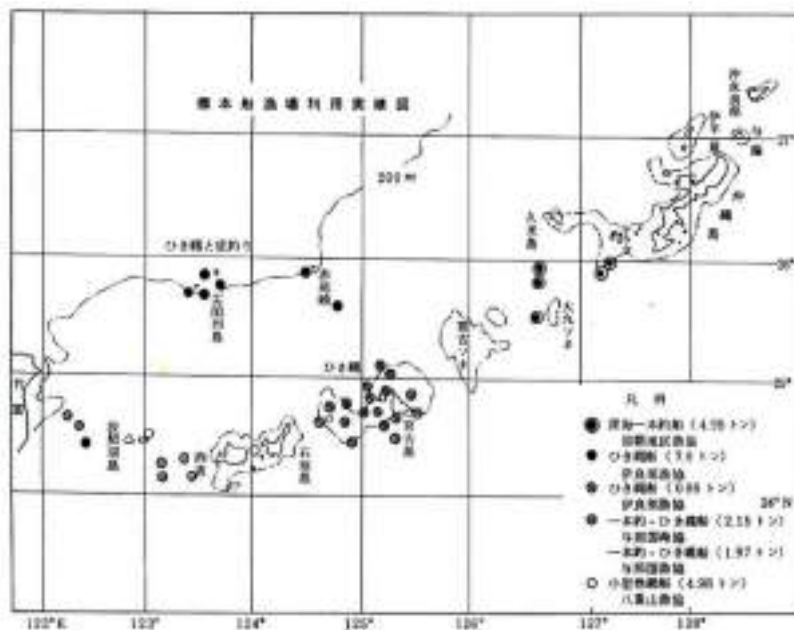
各地の漁業者の皆様にも調査の趣旨、目的を理解していただいた。

与那国漁協の仲嵩組合長と松川氏、八重山漁協の上原組合長と波照間氏、宮古支庁の下地水産業改良普及員、那覇地区漁協組合長の他皆様方に漁業者の紹介、漁獲量調査の協力等、

ご配慮をいただいた。

漁業種類	漁協	協力者	漁船規模	海域	主な対象魚
小型巻網 1隻	八重山	上地源光氏	3ト	石垣島近海	ミジュン、ガツン、 グルクマ
深海一本釣 2隻	与那国 那覇地区	小島、翁長氏 國吉氏	1～3ト 5ト	与那国近海 大九ソネ他	アカマチ、 シチューマチ。
曳縄 4隻	与那国 伊良部	小島、翁長氏 國吉守夫氏 前泊氏	1～3ト 7.6ト 1～5ト	与那国近海 尖閣海域、 宮古近海	カツオ、マグロ、 カジキ

### 標本船、漁場利用実績図



(「昭和 52 年度 沖縄水試事報 p7」より)

この標本船調査によって、どの水域では、どの時期に、どんな漁法で、どんな魚が、どの位水揚げされたか、(これは3漁協市場セリ帳より調査)。

漁業の実態が概ね把握できる。

### 標本船調査の雑感

漁業者探しは、私の知人、海人仲間、市町村の水産普及員、水産担当の職員とか、漁協の組合長、職員に紹介してもらった。漁業者を紹介してもらおうと、直にお会いして、調査の趣

旨を接明し、標本船調査をお願いした。反応はいろいろあった。忙しいからこんなことができると文句も言われた。でも、優れた技術を持っている人、儲かっている人は理解が早かった。この調査は大事だ。これから必要なことだからと、協力の意思を示してくれた。

その代わりに、絶対迷惑はかけませんからと、調査方法をしっかりと説明して承諾してもらった。また、漁業者は厳しい海上労働のあとで、操業した日時、漁場、魚種、漁獲量などを調査表に書いてもらうため、何かと勘違い、記入ミスがあったらということで、県水試に送る前に、調査表を漁協の職員にチェックし、整理してから送ってもらう方式をとった。

与那国漁協の場合も、組合長の指示で、松川さんが調査表をきれいに整理してくれたので、助かった。カジキの水揚げも種類もしっかりとチェックしてくれた。セリ帳を見れば、誰が何と揚げたか、毎日把握できる。また漁場はどこそこだとポイントのチェックもできる。

結局、この標本船調査は、漁業者と漁協が二人三脚体制で協力してくれたお陰で、調査はスムーズに運んだ。

あとは成功の鍵は人間関係である。海人はとっつきにくい。口が重くて、気難しい。

でも、海人は不思議である。時間を掛けて付き合えば、皆気持ちのいい人ばかり。

宮古ではオトーリ（一気飲みの酒座）もした（笑）。こんなあんなで深く、長く付き合ってみたら、人のよさがほんとに分かる。

与那国に行った時の思い出を1つ。与那国町役場の米盛氏をお願いしたところ、漁業者の自宅を訪ねる前に、ひと仕事片づけたいとのことで曰く。「先日ベトナムの漂流難民が乗ってきた船（ボート）が久部良漁港内に繋がれている。これを漁港の奥に移動し、固定繫留したい」とのことだった。1960年代からベトナムは戦争状態にあり、米軍が介入、圧倒的な物量、近代兵器による軍事力で、焦土と化していた。ベトナムの空爆にB52が沖縄から出撃していた。ベトナムの人々から沖縄は悪魔の島と言われていた。胸の痛む思いであった。

1976年ベトナムは南北統一をみたが、南シナ海へ脱出する難民（ボートピープル）の悲劇が報道されていた。南シナ海から遥か彼方の遠方に位置する沖縄に、難民漂流船がどのような経路でたどり着いたのか、その時は感慨と複雑な思いにとらわれたものである。

### 尖閣曳縄標本船、國吉守夫さんのこと

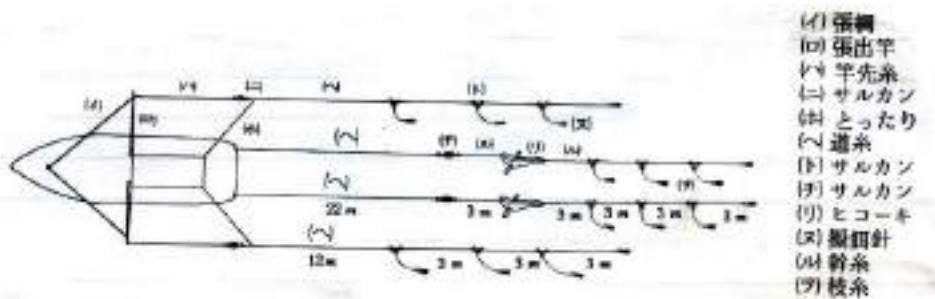
漁業者への聞き取り調査（尖閣研究 2012年 P77）にこの曳縄標本船の國吉守夫氏が紹介されている。同氏は昭和4年生、終戦直後台湾でカジキ、カツオ船に従事、台湾北部海域のアジンコートから尖閣海域を漁場とした。26歳で宮古に戻る。尖閣海域では深海一本釣、シマガツオ（ウブシュー）漁を得意としている。また漁業先進地長崎で、底立延縄、ジャンボ釣りの漁法を習得導入し、漁業技術の向上、創意工夫に熱心である。年間水揚げ数千万円、地元では「尖閣長者」と呼ばれている。



國吉 守夫氏



尖閣諸島海域における標本船（曳縄）の操業



伊良部のカツオ、スマ曳き縄（「沖縄県の漁具・漁法（1986.3）」より）

なお、曳縄標本船（7.6ト）は赤尾嶼、尖閣列島周辺で主に操業した。

昭和52年度の報告を見ると月別魚種別漁獲状況は下表の通りである。

尖閣周辺で操業した標本船は半年間（4月～9月）で13トを漁獲し、4月にはヤイトを主な、6月以降の半年間はカツオを主に漁獲した。内訳はカツオ39%、ヤイト19%、サワラ4%、あとシイラ、ハガツオの順となっており、その他36%が占めている。

曳縄標本船 昭和52年度月別魚種別漁獲量（単位：kg）

尖閣周辺ひき縄標本船										
月	操業日数	カツオ	ヤイト	ハガツオ	サワラ	キハダ	シイラ	サメ	その他	合計
4	13	250	1,770	100	70	0	40	0	810	3,040
5	12	96	590	0	431	0	80	0	715	1,912
6	15	1,000	150	0	0	0	0	0	1,516	2,666
7	14	2,560	30	0	0	0	0	0	590	3,180
8	7	1,300	20	0	0	0	0	0	320	1,640
9	11	0	0	0	0	0	0	0	910	910
計	72	5,206	2,560	100	501	0	120	0	4,861	13,348

（「昭和52年度 沖縄水試事報」より）

## 曳縄標本船が実証 ー 尖閣諸島は好漁場



左：大正島は曳縄の好漁場、宮古古池間の曳縄船が操業に励んでいる。  
右：曳縄で釣り上げたシビマグロ、カツオ、シイラ、オキアジ。(長嶺巖 2011)



冬場の尖閣諸島は曳縄だけでなく、一本釣、底延縄の好漁場でもある。  
伊良部島の漁船が、魚釣島沖合でスマ(ウブシュー)を竿釣りしている。  
(漢那竜也 2013)

### 200 海里水域内漁業資源調査 2010 年代も継続実施

沖縄海域(尖閣諸島海域を含む)における沖縄県水産試験場の漁業資源調査は、国の委託費により実施され、200 海里水域内(沖縄海域)資源評価に資することを目的としている。本調査は 1970 年代後半に始まり、その後調査事業名の変更、対象魚種の変化が見られるものの 2010 年代も継続実施されている。

深海一本釣漁業の対象種であるマチ類については主要漁場が宝山、大九ソネ、八重山雌雄返、尖閣諸島海域であること。資源回復のため禁漁保護区の設定するなど、調査研究の進展がみられている。

また沿岸マグロ延縄漁業、パヤオ漁業の対象とするマグロ類、とくにクロマグロについては漁獲統計、魚体調査などを行い、資源管理に必要な基礎データの収集に努めている。



## 2、中国武装漁船団の闖入と“尖閣守れ”漁民大会

### 1978年 突如、中国武装漁船団 尖閣領海に侵犯

尖閣諸島に百ト級の武装漁船団約 100 隻が、こつ然と現われ、底引き網操業中の中華人民共和国（中国）船籍の漁船を第 11 管区海上保安部石垣保安部の巡視船やえやまが発見した。1978年 4月 12日の朝である。

突然の事件に「武装の中国漁船団、先島漁民に強いショック、カジキ漁など始めたばかり、新たな漁場荒らしに怒り」（琉球新報 4.13）。巡視船が、魚釣島領海に侵犯している 16 隻に退去を求めたが応じることなく、「この地は中国の領海、我々は操業する」の趣旨の中国文を板にチョークで書いて示した。領土権を主張したのである。（琉球新報 4.15）

しかも、中国大船団の半数は機銃を装備しており、尖閣諸島領海警備本部によれば船体番号から確認したところ「●漁」上海船籍が多く「青漁」山東省青島市、その他「宇漁」浙江省寧波市、「舟漁」浙江省舟山島、「烟漁」山東省烟台市の船籍であり、総数 140 隻程度としている。これまでの調査から中国漁船団の乗組員に中国の報道関係者か政治局員のような人が乗り込んでいる可能性が強いと発表している。（沖縄タイムス 4.16）

海上保安庁は尖閣諸島現場海域に九州管区から巡視船を急遽直行させた。

第 11 管区“おきなわ”“のぼる”、第 10 管区鹿児島から“さつま”、第 7 管区門司から“きくち”、第 5 管区“くま”の 350 ト～ 900 ト級である。（新報 4.13）

なお、水産庁の漁業取締船“青雄丸（377 ト）”も尖閣海域に急行している。（新報 4.14）

台湾漁船が先島の宮古八重山海域や尖閣諸島海域で操業している実態は、かねて以前から散見されていた。漁業取締船、海上保安庁巡視船は常時監視を実施、領海侵入船は退去警告を行ってきた。

1977 年末から 1978 年始めにかけ台湾の小型漁船が領海侵入し、不法操業が目立つとして、県水産課は県水産試験場の漁業調査船“図南丸（216 ト赤嶺正弘船長）”に印南昇



(琉球新報 1978.4.13)



中国漁船は「魚釣島は中華人民共和国の領土である」との板書を示している。（琉球新報 1978.4.15）

漁業監督吏員を乗船させ尖閣諸島のパトロールを実施している。

しかしながら、今回の中国武装漁船団の大挙襲来は初めてである。

「中国漁船団は・・・17日夜半から18日未明にかけて活発な動きを見せていたが、船団はその後、航空機の確認でこれまでの約140隻から200隻にふくれ上がっていたことが判明した。同船団は18日午後6時現在、魚釣島北西方向の領海外で終結の状態。」(沖縄タイムス、4.19)



中国武装漁船団、200隻にふくれ上がって、魚釣島北西沖の領海外に終結している。(18日午後3時20分撮影) (沖縄タイムス 1978.4.19)

### “尖閣の海守れ” 島ぐるみの漁民大会 千人余 ウミンチュ結集

沖縄県下の漁業者は強い危機感を持ち、尖閣の海を守るべく結集して尖閣諸島漁場を守る漁民大会を開催することになった。1978年4月20日、場所は那覇市奥武山球場広場である。主催は沖縄県水産振興会で沖縄県漁業協同組合連合会を始めとする各水産団体との共催となった。当日は北は国頭漁協から南の与那国漁協まで33漁協の組合員、関係者が参集し約1000名余の大抗議集会となった。

「『去る十二日、中国漁船団が領海を侵犯するという、われわれの予想だにできなかったことが起きた・・・』との経過報告を聞き入る漁民たちの表情は硬い。続いて各漁協は代表が意見表明。那覇の我那覇生精さんは『精神的にも経済的にも損失は計り知れない。火急的、速やかに尖閣を事件発生前の状態に戻さなければ路頭に



領海侵犯に怒り爆発 漁民大会、漁民の死活問題、計り知れない経済、精神的損失 漁場確保強く訴える きょう代表団派遣 (沖縄タイムス 1978.4.21)

ことになる』と訴えた。・・・『地元八重山にとって晴天のへきれきというべきもの』（八重山）、『操業中、中国漁船団と遭遇、危険を感じて島に引き揚げた。死活問題だ』（伊良部）と次々に事態を憂慮する声で、政府に対する早急な現状打開を訴えた。」（沖縄タイムス 1978.4.21）

大会スローガンは、

- 1、尖閣諸島海域における安全操業を確保せよ！
- 1、尖閣諸島領海の外国漁船操業を許すな！
- 1、尖閣諸島に緊急避難施設を早期実現せよ！
- 1、祖先から受け継いだ尖閣漁場を守ろう！

農家の人々は、土地や山林に依存度が高く、地域共同体として団結力が強い。

一方、漁業者（ウミンチュウ）は、個人各々の漁業活動で自立した個人事業者である。そのため異論百出で組織的に大同団結が不得手である。尖閣の海を守る漁民大会に千人余の漁業者が結集して抗議の声を上げたことは特筆に価する。抗議する漁民の熱気と行動は1950年代の島ぐるみ土地闘争エネルギーを彷彿させるものである。



沖縄全県下から集まった漁民たちの表情は険しかった。ふだん、ろくに口もきかない漁民たちは、思いをこめたプラカードを手にハチマキ姿で参加した。「尖閣諸島領海で外国漁船操業を許すな」、「祖先から受け継いだ尖閣漁場を守ろう」・・・と。（「週間朝日 1978年5月5日号」より）

## 侵犯 12 日間後に 中国船団退去 4 か月後に 日中友好条約締結

稲嶺一郎氏は回顧録の中で次のように述べている。

「4月20日の大会の後、即要請行動に動いた。県漁連玉城徳幸会長、県水産振興会糸満三郎副会長、那覇地区漁協我那覇生精組合長、上原星一久米島漁協組合長、仲里全吉与那原漁協組合長ら代表が上京し、衆参両院の沖縄委員会に要請書を手渡し、実情を訴えた。関係各省庁に対しても陳情に歩いた。一方、日本政府は大使クラスの外外交渉を進めていたが、



(私は) 民間レベルの日中友好組織、人脈を駆使することになった。漁民大会の翌日中国の(コウヒョウ) 副首相が『今回の事件は偶発的なもので、平和友好条約の早期締結を望む中国の方針に変わらない』と発表した。そして4月24日、中国漁船団は尖閣海域から退去した。この4ヶ月後日中友好条約は締結された。しかし肝心の尖閣列島問題は結局残されたままだった。』(「稲嶺一郎回顧録 世界を舞台に p563~p564」1988 沖縄タイムス刊)。

結局、日中政府間の協議で、なんとなくやむやのまま処理され提出しまった。

## 石油資源探査に動く中国 侵犯事件に新たな見方

改めて中国武装漁船団の尖閣諸島領海侵犯事件の背景に政治外交の問題があり、尖閣の石油資源開発に絡んでいることは明らかだった。

尖閣諸島と海底油田と題して「石油資源探査に動く中国、資源獲得競争に名乗り? “侵犯事件”に新たな見方」(琉球新報 1978.4.18)と報じている。

稲嶺会長の「しかし肝心の尖閣列島問題は結局残されたままだった。」の発言は意味深長である。

「・『沖縄近海及び尖閣列島海域資源開発委員会』(稲嶺一郎会長)が去る6月(中国武装漁船事件から3年後の1981年6月)に発足している。沖縄の財界が中心となり、“和製メジャー”を創設して尖閣の“大油田”に挑もうという壮大な構想。稲嶺会長は発足の会見で『われわれは10年待った。復帰したら(尖閣油田)開発が進むと思ったが、政府は、政府は中国に遠慮している。裏切られた感じであり、だまっていられない』との心境を述べ



た。漁業資源調査(後述する1981年7月沖縄県が実施した尖閣諸島周辺漁業調査)程度で、“裏のけん制”が働く、ましてや油をや・・。尖閣の波は、やはり荒いというべきか。」

(沖縄タイムス 1981.7.28「尖閣の自然(7) 一資源調査に同行して一“油田”絡み開発多難」)

さきに、久宗高氏が海洋問題は、何も漁業資源にとどまらず、海底石油問題、安全保障上の観点から総合的に判断すべき問題だと指摘されたのは、まさに達見と言えよう。

### 3、尖閣諸島の危機に対応した沖縄県の2つの動き

#### 1、1978年11月、県漁場利用対策会議を開催

##### 尖閣漁場の現状把握、可能性を検討

この会議の開催は、中国武装漁船の尖閣襲来から半年後の昭和53年11月17日である。沖縄海域では漁場をめぐる県内外の漁業間の摩擦が懸念されるが、本県の広い沿岸沖合海域の中から特に尖閣諸島海域の漁場利用をとりあげ、いろいろな問題点と可能性を提起し、調査検討していきたいとの会議の趣旨であった。

なお、この機会には沖縄海区漁業調整委員会が主催し、同事務局が呼びかけて関係機関、宮古八重山の漁業関係者が参集した。この時のメンバーは以下の通り。

西海区水産研究所：真子渺浮魚資源部長

石垣市：牧野清（八重山地方史研究家）

琉球大学：西島信昇 ※総合討論司会者

沖縄総合事務局林務水産課：堀川昭夫課長

沖縄県水産課：伊佐次郎課長

沖縄県水産試験場：崎山憲一場長、当真嗣誠漁業室長、友利昭之助主任研究員

沖縄海区漁業調整委員：篠原士郎、長嶺彦昌、仲里全良、大城満助、仲間清一

新垣禎三、渡真利栄宏、玉城徳幸、渡具知裕徳、比嘉昌市

漁業協同組合：上原一八重山組合長、上地亮一伊良部組合長

蔵元広県近海鯉鮪組合、大城肇糸満漁協

漁業者 伊良部漁協：國吉守夫、前泊吉弘、川満実

八重山漁協：金城巖、具志堅用徹、仲元実、池田元

前半は、①尖閣諸島の概観、②海域における県内漁船の操業状況が説明され、③西海区水産研究所真子渺浮魚資源部長による「尖閣諸島海域における漁業とその資源」のテーマで、次いで④八重山地方史研究家牧野清氏による「尖閣諸島と沖縄の歴史的経緯について」のテーマで講演があった。後半は全員による活発な⑤討論だった。

#### ②、尖閣諸島海域における県内漁船の操業状況

①は割愛し、②の尖閣諸島海域における県内漁船の操業状況は、表3の通りである。

漁業形態は、底魚一本釣、マグロ延縄、底延縄、サンゴ業者が周年行われ、5月から10月期には、カツオ、カジキ等の回遊性魚を対象とした釣り、曳き縄漁業が営まれている。昭和52年の業態別、出漁隻数、漁獲高は次表の通りである。

底魚一本釣は104隻577ト、4億59百万円、マグロ延縄は28隻503ト3億36百万円、底延縄19隻311ト3億11百万円と続き、カツオ、曳き縄、サンゴの順になっており、合計は隻数168隻、生産量2590ト、生産額15億16百万円である



昭和 52 年尖閣諸島海域への出漁状況 (漁協別)

(単位：隻、ト、百万円)

漁協	漁業種類	底魚		かつお 一本釣り	まぐろ はえなわ	さんく 探	底はえなわ	計
		一本釣り	曳 縄					
那覇地区 漁協	隻数	18	-	-	-	-	-	18
	生産量	323	-	-	-	-	-	323
	生産額	272	-	-	-	-	-	272
那覇市 沿岸漁協	隻数	1	-	-	22	-	-	23
	生産量	3	-	-	225	-	-	229
	生産額	3	-	-	143	-	-	145
糸島漁協	隻数	2	-	-	6	-	19	27
	生産量	10	-	-	277	-	211	599
	生産額	6	-	-	194	-	311	513
名護漁協	隻数	2	-	-	-	-	-	2
	生産量	22	-	-	-	-	-	22
	生産額	18	-	-	-	-	-	18
早良市 漁協	隻数	18	4	2	-	2	-	26
	生産量	18	4	72	-	0.35	-	95
	生産額	18	2	2	-	17	-	39
池間漁協	隻数	15	14	6	-	-	-	35
	生産量	2	4	24	-	-	-	30
	生産額	2	3	7	-	-	-	12
伊豆郡 西海漁協	隻数	-	7	6	-	-	-	13
	生産量	-	260	377	-	-	-	637
	生産額	-	130	113	-	-	-	243
八重山 漁協	隻数	24	-	7	-	-	-	31
	生産量	81	-	277	-	-	-	358
	生産額	81	-	55	-	-	-	137
中郡 西海漁協	隻数	24	23	1	-	-	-	48
	生産量	119	100	80	-	-	-	299
	生産額	56	57	24	-	-	-	137
合 計	隻数	104	48	22	28	2	19	168
	生産量	577	263	230	503	0.35	311	2,590
	生産額	459	192	202	336	17	311	1,516

(「漁場利用調整対策会議報告 昭和 54 年」より)

隻数では、底魚一本釣 104 隻、曳縄 48 隻、まぐろはえなわ 28 隻の順。

生産額では、底魚一本釣 4 億 5 千 9 百万円、まぐろはえなわ 3 億 3 千 6 百万円、底はえなわ 3 億 1 千 百万円となっている。

### ③、真子渺氏の講演「尖閣諸島海域における漁業とその資源」

#### 春季 マアジ、サバ漁場形成？ 底魚有用魚分布 エビ籠も有望？

西海区水産研究所真子渺浮氏の講演の要旨の一部を紹介する。

尖閣諸島海域を 27° N～25° N、125° E～121° 30'E に囲まれる約 46,000 k m<sup>2</sup> の水域で、魚釣島はほぼ中央に位置し、東シナ海南西部の大陸棚外縁部に属し、水塊配置から黒潮の主流域に位置しており、カツオ、ゴマサバなど南方系浮魚類、やや深みがキダイ、アカムツなどの底魚類が分布し、東シナ海における好漁場の 1 つとなっている。漁場環境は、尖閣諸島海域は黒潮の影響を強く受け、水温の季節変動が少なく、水深は深く、海底は比較的荒い、とくに南側は大陸棚斜面に属し急深の特徴となっている。

浮魚資源を対象とする漁業は大中型まき網漁業（網船 111 ト型）で、尖閣諸島海域のまき網の約 15%。魚種はマアジ、サバが多く、その他はムロアジ類、マルアジである。漁期は秋期から冬期で、春～夏は少ない。漁場別には 123° 以西の漁獲が周年を通して多く、123° 以东は 10 月～12 月に漁獲が増加する。

尖閣諸島海域における以西底びき漁船の操業は比較的少なく年間 5600 トで全域の 3% にすぎない。漁業根拠地から遠距離にあり、有用魚が少ないことがその理由としている。漁獲対象はレンコダイが最も多く、次いでエソ、イカである。近年マアジが以西底びきで 1 月～3 月に漁獲が増加している。

尖閣諸島海域の大陸棚斜面域、深海漁場の調査結果を紹介している。

水産庁調査船開洋丸と用船（ベーリング海から締め出された北転船）のトロール調査によると、250m 深以浅では、以西底びきによって漁獲される深み漁場の魚種と共通している。250～500m 層にはオオメハタ、ムツ、カガミダイなど。500m 層以深にはなじみのないグロテスクな魚のみで環境、生物分布の境界にあたるようである。

イカ類については春季と秋季に尖閣諸島海域でケンサキイカが漁獲される。冬季に南下回遊するのではと推測している。

今後の漁場開発については、台湾北方海域に潮境が春季に見られ、マアジ、サバの漁場が形成される。一本釣などによる漁獲を検討すること。深海底魚については、海底起伏が激しいため底びき網の操業は難しい。しかし有用魚は分布している。立縄式延縄、ヒゲナガエビのエビ籠などが考えられる。併せてイカ釣にも触れている。そして専業ではなく、他漁業との兼業が好ましいと述べている。



日本海南西部・東シナ海におけるマアジの系群別回遊想定図（月別産卵期を示す）

#### ④、牧野清氏の「尖閣諸島と沖縄漁業者との歴史的経緯について」講演

明治期に開拓者古賀辰四郎氏の尖閣諸島の開拓、また戦後は、宮古八重山の漁業者がカツオ一本釣漁業を行い、大ナベを魚釣島、南小島に持ち込み、半製品（ナマリ節）にして持ち帰ったことは広く知られた事実である。これら歴史的経緯について講演していただいた。

#### ⑤、参加者全員による討論会

漁業者、研究機関、関係者を交えた活発な議論がなされた。

尖閣諸島の漁場利用の実態を把握し、現状に対する問題と今後の課題がひき出された。

討論会の発言要旨を順不同で以下に紹介する。

#### サバ こつ然姿消したが・・・

長嶺彦昌（海区委員）：1950年代、久米島沖合の東シナ海大陸棚上で琉球水産（株）がサバはね釣、棒受網操業を行った。当初は大漁であった。が、豊漁のあまり、サバ（ゴマサバ）の価格が暴落した。あれだけ獲れていたサバの群がこつ然と姿を消し、1960年に操業打ち切りとなり、結局大きな赤字を計上した。・・・当時、琉球水産は55ト船と90トのサバ釣漁船2隻を持っていた。急に漁獲されなくなってしまい、船と乗組員をかかえて苦慮した。出漁しても漁獲されなくなったので、1960年に打ちきった。結局当時で25万ドルの欠損金を出してしまった。

真子渺（西海区水産研究所）：浮魚資源の変動は著しいものがあり、ゴマサバの資源についても移動したりするよりも減少したと考える。

#### ダツの追込み ゴマサバの中型巻き 有望

上原一（八重山組合長）：八重山の尖閣諸島海域の漁場利用は19ト型船が夏場にカツオ一本釣、冬場はアカマチ等底魚一本釣の操業している。2～3ト階層は、深海一本釣、曳縄、ベツ甲採捕を行っている。他にダツの追込み、ゴマサバの中型巻網も有望と思われる。・・・八重山の小型まき網の漁獲物は以前はムロアジ主体であったが、昨年からはグルクマ主体に変わってきた。ムロアジはマグロ延縄のエサに使用され、また鮮魚として販路も広いが、グルクマはエサにも不向きで、鮮魚では肉質が軟らかと、市場ではだぶつき販路に困っている。出漁すれば、いつでも満船帰港できるのだが・・・。

#### 曳縄漁場の価値高い 宮古島沿岸の漁獲10倍 標本船データから

友利昭之助（沖縄水試）：私は、主として浮魚類を対象とした漁業を、昨年度から水産庁の委託を受け実施している。「200海里水域内の資源調査」の資料に基づいて述べたい。現在、八重山、那覇地区、伊良部、与那国漁協の協力で標本船を定め調査している。

特に、伊良部漁協からは、尖閣諸島海域で操業している曳縄船（7.6ト）と宮古沿岸で操業している曳縄船（1ト未満）から操業成績を送っていただいている。

尖閣海域の曳縄船は赤尾嶼の西側海域が主漁場になっており、夜釣りや天候の悪いシケ時に、魚釣島島影にきてたまたま周辺海域で操業する程度である。宮古沿岸の曳縄船は、漁場が特定されず、宮古島沿岸一帯に広がっている。下表は両者の操業成績の対比である。空欄は報告もれである。

両者の操業成績を比較してみると1日当の漁獲量は宮古島沿岸では24.4kg、尖閣海域では271kgで単純比較ではあるが10倍である。1人1日当の漁獲量にならしても、尖閣海域では67kg、宮古沿岸では24.4kgであり、同海域の曳縄漁場としての価値を示す一つの指標になるのではないかと思う。

### 曳縄船の尖閣漁場と宮古沿岸漁場出漁船の漁獲量

尖閣漁場出漁船 FRP船 7.6トン 40馬力 4名									宮古沿岸出漁船 木船 0.86トン 14馬力 1名										
年月	航海回数	有漁回数	漁獲別 漁獲量 kg					計kg	年月	航海回数	有漁回数	漁獲別 漁獲量 kg					計kg		
			カツオ	キハダ	ソウダ	サワラ	シイラ					底物	カツオ	キハダ	ソウダ	サワラ		シイラ	アオリイカ
52-7	1	8	850	250	-	-	-	1,100	52-7	5	2	18	30	27	6	-	-	83	
8	5	13	3,410	750	-	40	-	4,994	8	18	9	66	183	-	43	6	-	485	
9	4	12	427	200	-	310	-	1,473	9	20	18	-	949	-	29	-	-	56	
10	3	11	-	-	-	764	-	1,296	10	19	17	-	610	24	-	-	-	118.5	
11	-	-	-	-	-	-	-	-	11	14	11	-	-	-	-	-	-	117.5	
12	-	-	-	-	-	-	-	-	12	22	21	-	-	-	-	-	-	135	
53-1	2	11	-	-	-	126	-	912	53-1	13	13	-	-	-	-	-	-	119	
2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	10	10	-	-	-	-	-	-	120.5	
3	1	2	-	-	-	-	-	350	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
4	1	5	-	-	890	445	60	990	4	15	15	-	-	100	12	41.5	15	-	
5	2	7	-	150	1,650	170	16	970	5	16	13	160.5	10	27.5	12	53.5	-	62	
6	1	1	-	200	1,090	-	-	1,290	6	16	15	147.5	9.5	36	100.5	10.5	-	-	
計	20	66	4,587	1,550	3,450	1,855	70	6,289	17,931	計	168	144	367	1,791.5	217.5	204.5	207	507	790.5

月平均航海回数 2.2回  
 1航海当日数 3日～7日  
 1日当漁獲量 271kg

月平均出漁回数 15.2日  
 1日当漁獲量 24.4kg

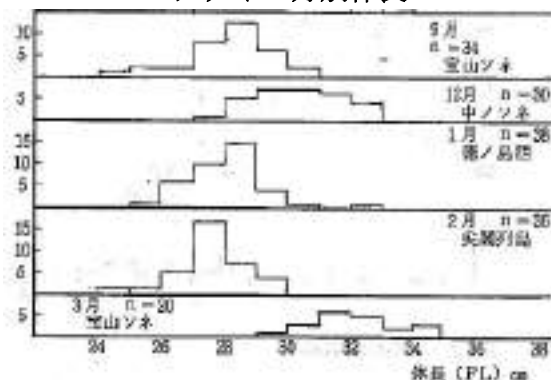
(「漁場利用調整対策会議報告 昭和54年」より)

### マチ類 年平均水揚げ千3百ト余

**当真嗣誠 (沖縄水試) :** 本県の底魚類を対象する漁法として、深海一本釣り、底延縄、立延縄漁業が営まれ、極めて重要な漁業となっている。対象魚種はいわゆるマチ類である。この12年間の平均水揚げ高は1,371トであり、年により多少の変動はあるが、横這い状態で推移している。昭和40年代と現在では漁船規模、漁労装備、漁具等に大きな相違がある。セリ市場は県漁連、那覇地区、糸満の夫々で水揚げが多く、マチ類の中では、アカ

### 魚体 年々小型化傾向

#### ヒメダイの月別体長



(「沖縄水試事報 昭和54年度」より)

マチ、シチューマチ、マーマチ、クルキンマチの4種が91.5%を占める。

試験場の魚体測定結果によるとアカマチとマーマチ魚体は年々小型化傾向にある。シチューマチ、クルキンマチはとくに年変化は見られない。赤マチの年齢と体長は明らかでないが、シチューマチは1年魚12cm、2年魚24cm、3年魚29cm、4年魚34cm、5年魚38cmの成長曲線を描くと言われている。

### **安全操業施設 造ってほしい 早急に必要**

**上地亮一（伊良部組合長）：**伊良部漁協は尖閣諸島海域に大きく依存している。とくに赤尾礁付近では周年操業している。伊良部漁協所属船はカツオ一本釣、曳き縄、底魚一本釣他の漁業に従事している。尖閣海域は操業の安全確保の面で問題がある。

1 つは赤尾礁が米軍の爆撃演習地になっているため、出漁制限をうけ、大きな損害を受けている。

2 つは、避難港の問題がある。昨年伊良部漁協の船が1隻遭難している。

係留ブイなど漁船を安全に係留できる危険防止施設の設置を希望したい。

**篠原士郎（海区委員）：**伊良部漁協のカツオ漁業は尖閣諸島海域、なかでも、赤尾島の西側漁場に大きく依存していることであった。もし、同海域にブイ等の安全操業施設を設置した場合は、出漁隻数がふえ、漁獲がさらに増大すると見込まれるのか。

**上地亮一：**資源としてはまだまだ余裕があると思われるので当然に漁獲の増大は期待できる。

**國吉守夫（伊良部漁協）：**私は船長として尖閣死闘海域を主漁場に操業している。カツオ釣の場合、3時ごろエサ取りに出漁する。約8時間で赤尾礁西側の漁場に到着し、操業時間は2～3時間、短時間で4.5トンのカツオを釣り帰港する。

尖閣海域の海底地形は起伏がないため、投錨しても錨がかからず、夜間に休息をとる場合も、船は漂泊している。漁場はすれすれに形成され、手を伸ばせば岩に届く程に接近して操業している。

### **イセエビ、夜光貝、高瀬貝の磯根資源 豊富 可能性探るべき**

**池田元（八重山漁協）：**私が他の漁業者から聞いたところによると、尖閣海域には、イセエビ、夜光貝、高瀬貝、甲イカ、タイマイなどの水産物資源が豊富であるという。40年前の話であるがイセエビをムキ身にして300kg位獲ってきたという事例もある。このような先達者の話をきくと埋もれた資源があるような気がしてならない。魚類以外の水産動物についても調査を進め、漁業の可能性を探るべきだと思う。

**篠原士郎：**イセエビ類、貝類、甲イカ類を対象とした最近の事例にないか。

**池田元：**イセエビ、夜光貝、甲イカについては聞いている。ただ、漁業者特有の漁場の閉鎖性から、尖閣諸島海域と答えるだけで、はっきりした位置は教えてくれないので、それ以上は詳しい場所を聞くことはできなかった。



## 複合操業なら 経営成立 大陸側漁業資源 データ分析必要

蔵元広（県近海鯉鮪組組合長）：尖閣諸島海域は高級魚の漁場であるが、真子先生の話にあったように、単一形態の漁業を営むことは難しいと思う。やはり漁期に応じて別形態に転換していくような複合の操業形態をとらないと漁業経営としては成立しえない。ただ、この場合、それぞれに応じた装備をしないとイケないというのが現実である。

司会西島信昇（琉球大学）：沖縄海域側の資源についてのみ話しているが、大陸側資源の利用方途についても考えられないか提起願いたい。

真子渺（西海区水産研究所）：もうすこしデータ分析しないとイケないと思う。

先程、話があった潜り漁業について興味をいただいている。

## 総括 今回提起された問題・課題 今後 調査検討望ましい

司会の西島信昇氏は討論の総括を次のとおり述べている。

1、尖閣諸島海域は優れた漁場であることは全体の一致した意見である。

係留ブイが設置されれば、出漁船は増加し、漁業生産は上がる。

2、尖閣諸島海域の大陸棚斜面域の水深 500m 以浅ではかなりの有用魚が存在し、立縄式延縄、エビ籠漁業の導入が示唆された。

3、これまで魚類を対象とした釣、網漁業のみを念頭において当海域の資源を論じてきたが、イセエビ、夜光貝、高瀬貝などの磯根資源や甲イカ、タイマイなどの水産動物も豊富であり、潜り漁業の可能性も大きい。今後資源調査を検討すべきである。

4、今日の会議は厳しい 200 海里時代に対応して、地先沿岸漁場の高度利用方途を見出すこと、特に尖閣諸島海域の漁場利用が当面の課題であるとして討論を行った。現地で操業している漁業者、研究機関、関係者から資料、問題提起があった。現状を把握し、そして可能性を見出して行くというのが目的であった。今後は提起された問題を調査検討していくことが望ましいと総括している。

これが次に述べる沖縄県の“尖閣諸島周辺漁業調査”に引き継がれる。

なお、同対策会議の内容は、「漁場利用調整対策会議報告—尖閣諸島海域の漁場利用について—昭和 53 年 11 月 17 日」（沖縄県農林水産部 昭和 54 年 1 月刊）にまとめられている。



## 2、1981年7月、沖縄県による尖閣諸島周辺漁場調査を実施

### 西銘知事 尖閣諸島の漁業基地 可能性検討

昭和 56 年の新年早々沖縄県西銘知事が尖閣諸島に県の調査団を派遣するとの情報が流れた。中国武船団の尖閣襲来、沖縄漁民の抗議大会から 3 年後である。

「西銘知事は・・・とくに漁業振興の推進をはかるため、同諸島の活用を構想し、・・・56 年度に知事自らが団長となり、・・・尖閣諸島の基礎調査を実施したい意向だ。調査団は各分野の学者、専門家、県当局などで構成し、石垣市をベースに、空から海から県警へり、海から水産高校実習船、水産試験場『凶南丸』、チャーター船を動員したいとしている。」(沖縄タイムス・1981.2.3・「)



### 尖閣諸島の波高し

(沖縄タイムス 1981.2.3)

#### 外務省、慎重な対応求める

この背景には「中国漁船船団約百隻が尖閣諸島を侵犯する事件があり・・・その時も日中政府間の協議で、なんとなくうやむやのまま処理された。今回の漁業調査は、政府の煮え切らない態度にシビレをきらした県が、先手を打って実力行動に出たともとれる。最近では経済界が石油資源開発委を発足させて、尖閣油田へねらいもつけている。・・・去る 2 月『私が団長になって尖閣に乗り込みたい』と打ちあげた。知事自らが島に上陸するというビッグニュースにマスコミ陣も色めき立った。」(沖縄タイムス・1981.7.14・「尖閣列島の波高し」)

ところが、中国は県の漁業調査を非難し、日本側に中止を求めてきた。「県は・・・11 日間の日程で尖閣諸島周辺の初の漁場調査を実施する。調査団は喜久山農林水産部長を団長に水産試験場、琉球大学のスタッフなど総勢 50 人。当初、西銘知事が団長となる予定だったが・・・知事不参加・・・尖閣諸島をめぐる中国との領有権問題は依然としてたな上げ状態にあり、日中友好関係への影響を配慮した外務省が知事に対し『慎重な対応』を求めた、との見方が有力だ。」(「琉球新報・1981.7.8・「外務省、慎重配慮を望む」)



(沖縄タイムス 1981.7.14: 世事批評)

このように、中国、台湾が領土権を主張し緊張した国際情勢にあったことから、沖縄県が 7 月 11 日から実施する尖閣諸島の漁場調査は大きな注目を集めた。

## 尖閣漁場調査 沖合漁業資源と沿岸磯根資源、2つを調査

尖閣諸島周辺漁場の利用開発を促進するため、海上班と陸上班の2つに分かれ、

A：沖合漁業資源調査、B：沿岸の磯根資源調査を実施した

調査団の構成



主な調査項目と調査参加者は下記の通りである。

### A：尖閣諸島周辺海域沖合漁業資源調査

浮魚漁場調査（アジ、サバ、ダツ）

底魚漁場調査（マチ類、）

漁場環境調査

水産試験場 次長：嘉数清 漁業主任研究員：川崎一男 研究員：喜屋武俊彦

琉球大学理学部大学院生：白神悟志 北海道大学水産学部大学生：西銘史則

財団法人水産公社事務局長：桃原仁一 伊江漁業協同組合：又吉久保

水産試験船「図南丸」（216.09ト） 船長：赤嶺正弘



沖縄県水試場所属・水産試験船「図南丸」（216.09ト）

## B：尖閣諸島沿岸の磯根資源調査

海岸魚類、貝類など底生生物調査

イセエビ類調査

海藻類調査、他

琉球大学理学部 部長：山里清 助教授：西島信昇、諸喜田茂充

熱帯海洋科学センター助教授：香村真徳

理学部大学院生：酒井一彦

水産試験場 増殖室主任研究員：当真武

研究員：島袋新功

八重山支場研究員：大城信弘、

渡辺利明、勝俣亜生

県農林水産部水産振興課

友利昭之助、上原孝喜

県総務部広報課：伊波久雄、山城直吉

拓洋土木調査船ぐるくん 船長：内間良喜

潜水士：横井兼典

調査船ゆたか3号 船長：大城兼一



尖閣漁場調査をとりまとめた「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」  
(沖縄県農林水産部 昭和57年3月刊)

### 西銘知事の思い出

今回の尖閣諸島の調査については、定例の知事を囲んでの記者懇談会がもたれた折、尖閣諸島が話題になったことが、事の発端となったと伝えられている。

今回の学術調査団（磯根資源調査）の魚釣島上陸及び滞在期間中は、海上保安庁の巡視船の監視のもとに行われている。当初、調査団長は知事自らとのことであったが、時間経過とともに団長は部長、課長と降格してゆき、終には、現地の調査はヒラの係長（筆者）が連絡役、世話係として同行することになった。様々な圧力が内外からあったであろうと想像に難くない。調査団の出発以前、東京出張から戻った課長さんは沈痛な面持ちであったことが記憶に残っている。しかしながら、たかが一県の学術調査団の派遣に過剰に反応することは、大国の沽券にかかわるものではないかと思ったものである。

西銘知事は在任中に、ラバウルなど訪問し、南方カツオ漁業に頑張っている沖縄漁民の皆さんを激励している。

また、魚食普及の講演会で「カツオの味噌あえも、グルクンの唐揚げも美味しいが、何といてもエーグワのマース煮が一番だ」とあいさつし、会場を沸かせた。

知事は中々のイマイユの食通であった。

## A：沖合漁業資源調査

### 調査日程

昭和 56 年 7 月 11 日、15：00 糸満漁港を出港。12 日、14：45 調査海域に到着して直ちに浮魚資源調査開始、15 日の 1：30 まで同調査を実施した。

15 日、魚釣島及び南北小島周辺の沿岸域におけるシジャー（オキザヨリ、タイワンダツなど）の蝟集状況調査を実施。

夜は 25° 50'N、123° 21'E から漂泊して集魚灯による集魚試験。

16 日魚釣島西方 8 マイル付近の海域で底魚漁場調査（底立て延縄釣獲試験）を実施。夜は南小島の北 0.5 マイルの所で停泊して集魚試験。

17 日、朝から波浪が高く、南北小島東邦海域における底魚漁場調査が不可能になったため予定を変更して、漁場環境（海洋観測）を実施。

18 日、台風 8 号の発生により波浪がますます高くなる中で 13：30 海洋観測を終了。台風避難のため船浮港へ向かう。19～20 日：台風避難で船浮港に停泊。

21 日、8：00 船浮港を出港、帰途につく。22 日、8：30 糸満漁港へ入港。

### ①、浮魚資源調査 報告：川崎一男

東シナ海における浮魚類に関する調査研究並びに魚獲統計に関する報告書は、水産庁西海区水産研究所、南西海区水産研究所から以前から刊行されている。

沖縄水試の前身琉球水産研究所ではサバはね釣り隆盛り時の昭和 30 年～34 年および昭和 27 年～39 年に調査が実施されているが、

近年は同海域では 浮魚類に関する調査はほとんど実施されていない。

この報告は浮魚類の魚群布調査の結果を報告する。

### 調査方法

調査範囲は 25° 46'N～26° 30'N、122° 30'E～124° 00'E に囲まれた範囲で、緯線に沿って 10 マイル間隔に 6 定線を設定し、昼夜連続航走しながら魚群探知機による魚群反応を調査した。周波数 50kc、測深範囲 0～260m レンジとした。

魚探記録から群れの長さ（L=哩）、高さ（H=メートル）を測定しその断面積  $L_i \times H_i$  を単群の魚群の魚群量指数とした。魚群反応がみられた場合は停船し、多鈎釣（ハイカラ釣）サバ用 50 本掛 7 基を用いて釣獲試験を試みた。

昼間の航走中は目視観察と曳き縄による表層魚の分布調査を、漁獲物は魚体測定、生殖線、胃内容物調査を行った。

調査は昭和 56 年 7 月 12 日 14：45 から 15 日 01：30 まで行った。



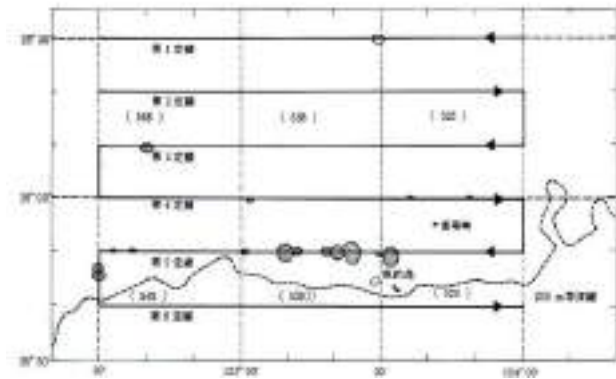
## 魚群の分布状況および魚群量

魚群探知機を作動し航走した距離は延 590 マルである。魚群反応がみられたのは 17 回、合計魚群量指数は 13.79 を示した。

右図に見る通り魚釣島北～北西海域では、魚群反応 10 回、魚群量指数 10.38 と高い数値であった。魚種確認のため多釣鉤を行ったが釣獲はなかった。この大群は底魚釣の混獲物、および水産庁、南西水研（俊鷹丸）の調査報告からほとんどサバ類（ゴマサバ）と類推される。魚群の遊泳層は 30m～100m の中へ低層であった。

### 浮魚資源調査航跡図及び魚群分布図

( ) の中は農林漁区番号



## 目視観察および曳縄釣獲試験について

魚群発見数は 17 群で、魚種の確認できたのはシイラ 9 群、カツオ 2 群、サバ 1 群であった。また流木付き 4 群、鳥付 3 群、素群は I 群から釣獲された。釣獲尾数はシイラ 28 尾、サワラ 12 尾で、シイラは流木付きと鳥付群から釣獲され、サワラは流木付きであった。大きさはシイラ尾叉長 47.1～60.2 cm、体重 0.95～1.90 kg の小型魚、サワラは 111.2 cm 7.8 kg の I 尾が揚ったが残りの 11 尾は 61.8 cm 1.2～2 kg の小型であった。シイラの胃内容物は、カニ、エビ類もみられ魚類ではトビウオ類が主であった。

## ②、シジャーの蛸集状況調査 報告：賀数清

魚釣島及び北小島の距岸 I マル以内の沿岸域において、伊江島出身者などの魚業者が乗った糸満の漁船により、マーシジャー（オキザヨリ）やヒラシジャー（ハマダツまたはタイワシダツ）の追込み網漁業が昭和 35 年頃まで盛んに行われていた。

「・・ダツ(方言でシジャー)のシーズンにはいり糸満町の漁夫は荒れがちな冬の海でのダツの追い込みに必死になっている。ダツは 11 月から 2 月までが漁期だが、ことしは 7 日までの 1 ヶ月余ですでに 3 万 5 千<sup>キ</sup>を水揚げし、昨年中の水揚げ高、1 万 8 千<sup>キ</sup>の 2 倍に達した。同町はかつてないダツの豊漁に活気を呈している。糸満独特のダツ追い込み漁は 15 トン以上の母船 3 隻に、クリ舟 4 隻がつき、はえなわでクリ舟が押し込んで母船に揚げる。母船 3 隻のうち 2 隻は漁場と糸満港間の運搬にあたり、漁夫は漁期の終わるまで漁場に残る。ことしは台湾近海の尖閣列島で 100 人近くの漁夫が出漁しているがひと航海で 1 万数千



尖閣列島近海で追込漁でダツ漁に励む（琉球新報 1966.12.10）

キを水揚げするという豊漁。またダツの値段が年末のため上がっているとあってホクホクだ。・・・」  
(1966.12.10・琉球新報・「ダツ大漁。1カ月で去年の2倍、糸満漁夫はホクホク顔」)

この調査は、同海域におけるシジャーの蛸集状況を調べるとともに、現在のシジャーまき網漁法により操業できる海況であるかどうかを見るために、又吉久保氏が行った。同氏は、伊江島漁協に所属し、トビウオ及びシジャーのまき漁業を現に営んでいる。シジャーの蛸集状況調査は、ゆっくり航走しながら船尾から枯れススキ（本来はワラを使用することが多いとのことである）を連続的に投入して、それに対するシジャーの反応状況を見て判断する伝統的な方法で行われていた。

調査結果は次のとおりであった。

- I、今回の調査ではマシジャーもヒラシジャーも群れをつくっている状況にはない。同海域で群れをつくり漁場として利用できるのは、かつて追込網漁業がおこなわれた時の漁期（旧暦の10月頃から正月頃まで）であろう。
- 2、同海域での潮流は激しく複雑であるので、シジャーまき網の操業には十分な注意が必要であるが、魚釣島の南側及び西側で操業することは可能である。



シジャーの蛸集状況調査、(魚釣島南側にて)  
(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

### ③、マチ類底魚 漁場調査 報告：喜屋武俊彦

釣獲試験は 昭和56年7月16日に大陸棚斜面域、魚釣島西8マイルと6マイル、大陸棚上42マイルの3地点でI回ずつ実施した。使用した漁具は立縄式底延縄である。1漁場に釣鉤5本付の25籠を2連結してI組とした。投縄後、魚群探知機で水深、海底地形を調査し、2時間経過後ラインホーラーで揚縄した。

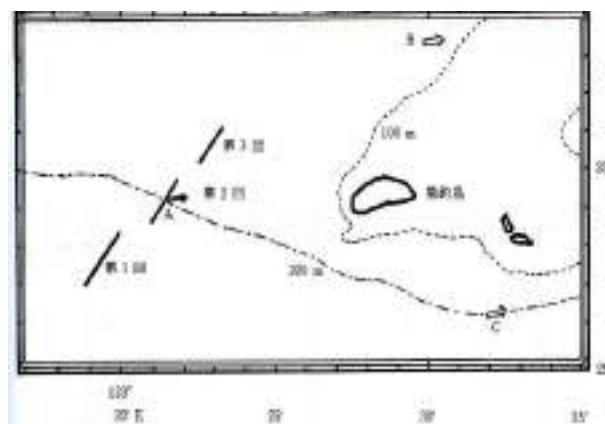
調査海域の海況をみると、魚釣島の北側と南側は海速 1.4 ノット、流向は東、魚釣島西側は流速 0.7 ノット、流向東北東で、黒潮主流域を示していた。また渦を巻いた潮目がいたる所に観察された。表面水温 28.8℃、50m 層 24.6℃、100m 層 19.4℃、200m 層 16.8℃で、水温躍層は 50m 層付近にみられた。

第 1 回目の釣獲試験は魚釣島西側 8 マイルの地点、水深 206~218m、起伏のあまりない地形であった。釣獲状況は 7 種 18 尾、漁獲量約 20 kg、有効釣獲率 7.2%、魚種はキダイが最も多く、次いでハナフエダイ、マハタ、マダイ、アカアマダイ、ヨリトフグ、ウツボ類であった。

第 2 回目は魚釣島西側 6 マイル、水深 150~180m、起伏の激しい海底地形である。釣獲状況は 8 種 24 尾、37 kg の漁獲量である。有効釣獲率 17.9%、魚種はアオダイが多く、カンパチ、サメ類、ヒメダイで、シマアオダイ、アオバダイは夫々 1 尾であった。

第 3 回目は魚釣島西側 4 マイル、水深 146~150m、大陸棚上の起伏の少ない地形であった。有効釣獲率 3.3% と低く、ヨリトフグ、ゴマサバが漁獲された。

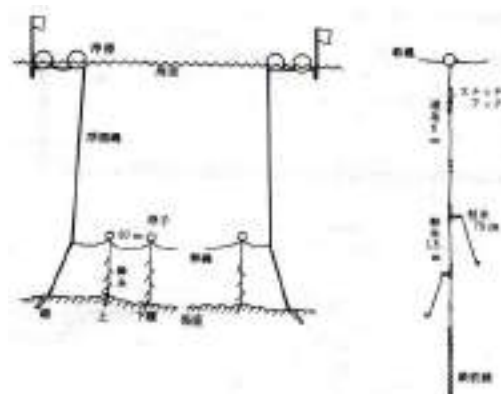
調査海域、G E K、B T 観測点



有効魚種は操業場所による魚種組織の違いがはっきりしていた。アオダイの体長組成を魚釣近海 28~35 cm と他の海域 32~47 cm と比べると小型であることが明らかである。マハタ体長 36.6~55.2 cm、キダイ体長 20.0~25.4 cm、ヒメダイ 24.4~29.2 cm であった。

尖閣諸島周辺海域の魚釣島周辺を黒潮本流があり、東向き強い潮流がみられた。今回使用した立縄式底延縄では、錘りの調整、浮標の調整等で十分に操業可能と思われる。

立縄式底延縄の構成と操業



釣獲試験が 3 回のみで充分とは言えないが、1 回目と 2 回目の魚種組成の違いは、漁場水深の違いによるものと思われた。

魚種別の生息水深をみると、キダイは海底近くに、アオダイは海底から少し浮上して生息しているものと思われた。他の海域漁場と比べると、沖縄本島北西側の東シナ海大陸棚斜面域より、有効釣獲率等から尖閣海域の方が漁場価値は高いと思われる。

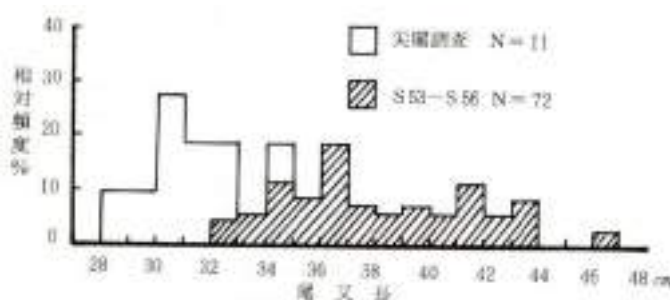
また、尖閣諸島周辺海域のマチ類は一般に小型魚が多いとの漁業者の情報があるが、今回

の調査でもアオダイは従来の他海域の漁場より小型であった。これは今回の操業場所によるものか、今後の調査資料の集積によって検討していきたい。台風 8 号の接近により魚釣島北側海域での試験操業を断念した。

今回の釣獲試験で漁獲されたアオダイ（方言名シチューマチ）、ヒメダイ（方言名クルキンマチ）の消化管内容物と生殖腺の調査が佐多忠夫（鹿児島大水産学部大学院）、西銘文則（北海道大学水産学部大学院）、白神悟（琉球大学理学部大学院）によって行われた。

アオダイの胃内容物は 2 個体から、腸内容物は 9 個体から得られた。アオダイは尾叉長 28.9～34.0 cm 体重 0.47～0.60 kg で、消化管内容物の重量は 0.13～10.40 g であった。内容物はオキアミ類、コペポータ類、端脚類、矢足類仔魚（釣餌のイカ足）で優占種はオキアミ類で動物プランクトンの出現が多い。アオダイの食性として動物プランクトン食であると考えられる。アオダイの生殖腺重量は 0.05～0.19g で、非常に小さく未熟である。2 個体は♀であったが、残りは♂♀の判別不能であった。未成年であった。

アオダイの体長組成



ヒメダイは 26.7～31.9 cm、0.3～0.6 kg (3 個体) で胃が反転していたこと。消化が進んでいたこともあって、1 個体の腸内容物はコペポータ類、オキアミ類が僅かにみられた。ヒメダイの生殖腺の判別から♀が 2 個体、生殖腺重量は 18.34g と 27.81g と大きく、卵巣内の卵径は 0.8～0.85mm であった。

今回はサンプル数が少なかったため、十分な結果が得られずとしている。

#### ④、漁場環境調査 報告：金城清昭

調査は昭和 56 年 7 月 12 日から 7 月 18 日まで、凶南丸で実施された。

浮魚調査時、底魚調査時にも海洋観測を行い、とくに石垣島北から、魚釣島北方まで観測点を設定して行われた。

調査項目は、転倒温度計、及び、BT による水温 塩分観測（深度別）、G E K による表面流況観測、各層観測点で栄養塩類及び魚卵、稚仔採集である。

今回の G E K 流況観測では、台湾東方から与那国西、東シナ海に入った黒潮は、流幅 40 マイル、最強流 2.2 ノットで魚釣島を洗うように東方に流出していた。1973 年長崎海洋気象台の観測では石垣島北方海域の黒潮は、流速は弱く、流向・流路が安定していなかった。また第 11 管区海上保安本部の G E K データからも流向流路が不安定であったとしている。

表面水面温は 28℃～29℃台であった。大陸棚上の中底層の水温分布を見ると冷水の突っ込みが北東側から、北西側から逆に暖水が突っ込みが見られた。表面塩分は大陸棚上

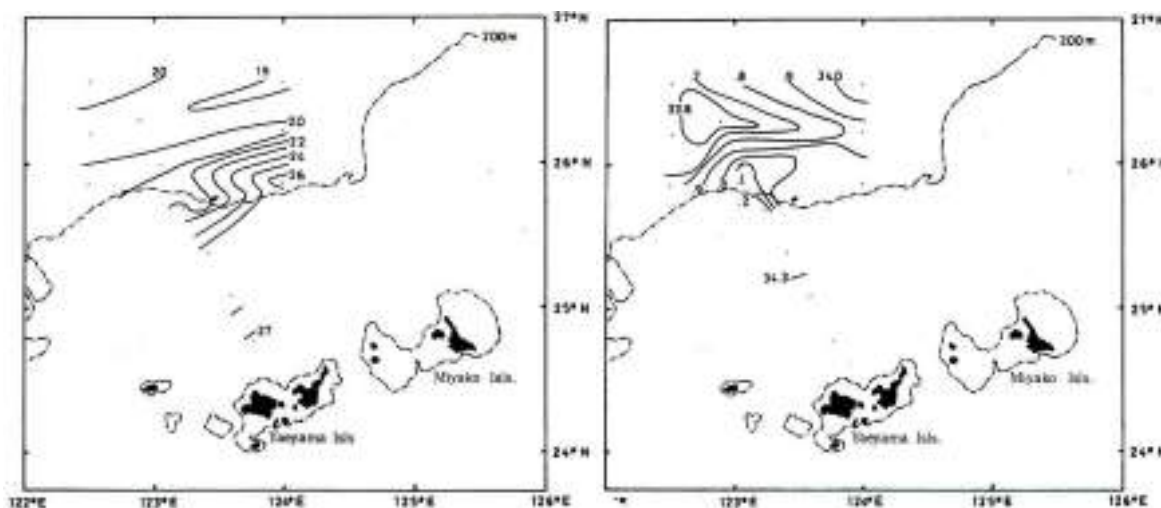


33.51%、黒潮域は 34.23~34.33%で大陸棚上から低塩分水の張り出しが見られた。夫々の水塊の特性を示すダイヤグラムから大陸棚上には高温低塩分、魚釣島の南から石垣島にかけて高温高塩分を示した。従って魚釣島周辺の大陸棚縁辺部は黒潮系水と大陸棚沿岸系水の混合域であることを示している。

栄養塩類（リン酸態リン、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素、及び三態窒素）の測定結果と分布状況を大陸棚上～黒潮流域～石垣島北側まで検討している。この海域の栄養塩類は大陸棚沿岸水と湧昇水により海底から供給される。観測結果から魚釣島北側の底層では高い濃度を示し、黒潮流域、石垣島北ではリン酸塩、三態窒素とも低い値を示している。垂直分布から栄養塩類の等量線の上昇が大陸棚斜面に沿ってみられ、これは深層水の湧昇を示していると思われる。これも長崎海洋気象台が、かねて長期にわたり観測している。

沖縄北西方の大陸棚縁辺での結果と同様であるとしている。

なお、今回の観測結果は、沖縄沿岸、黒潮域は貧栄養水域であり、大陸棚上はより栄養塩類が高いことを裏付けるものである。



75m 層水温水平分布 (July12~18.1981)

表面塩分水平分布 (%) (同左)

### ⑤、卵、稚仔魚調査 報告：喜屋武俊彦

本調査は魚釣島北側から石垣島にかけて、6 定点を設定し、丸稚ネット（1.3m 口径モジ網表層 10 分曳）、丸特ネット（口径 45cm、垂直曳 0~150m 深）で採集された稚魚、仔魚、魚卵等を査定するものである。魚介類はフ化後、幼生・仔魚・稚魚のそれぞれの段階で姿形が変態していく。これらを分類し査定していくことは高度な専門知識と経験が求められる。

今回の調査の丸稚ネット出現魚種は、稚仔魚 24 科 37 種総数 148 尾が科以上の段階まで分類査定できた。多く出現した稚仔魚はトビウオ類、ヒメジ科、アジ科、ニシン目シラスで



あった。I尾はマカジキ、バショウカジキ、ハタ科である。またイカ数稚仔もみられた。

カジキ類の稚魚が出現したことは、この海域がカジキ類の産卵海域であることを示している。魚卵の丸稚ネット採集物は不明が大部分であったが、エソ科、サヨリトビウオ、フリソデウオ属が査定された。丸稚ネット出現種は8科8種26尾であつた。魚種はニシン目シラス、ハダカイワシ科である。いずれも黒潮縁辺城南側であつた。

魚種別観測点別出現量特ネット、稚仔魚、魚卵

魚種	観測点	SO 1	SO 2	SO 3	SO 4	SO 5	SO 6	計
稚仔魚								
ニシン目シラス		-	-	-	2	1	1	4
オキエソ		-	-	1	-	-	-	1
ハダカイワシ科		-	-	-	3	-	-	3
ハダカエソ科		-	-	-	-	-	1	1
ウナギ目レプト		-	-	-	1	-	-	1
シイラ		-	-	-	-	-	1	1
ワニギス		1	-	-	-	-	1	2
ベラ科		-	-	-	1	-	-	1
チョウチョウウオ亜目		-	1	-	-	-	-	1
ウシノシタ亜目		-	-	1	-	-	-	1
サイウオ属		-	2	-	-	-	-	2
リンコB型		-	-	-	-	-	2	2
イカ類		-	-	-	1	-	-	1
不明稚仔魚		-	-	-	3	2	-	5
合計		1	3	2	11	3	6	26
魚卵								
不明卵		2	1	-	6	2	2	13

## B：魚釣島沿岸の磯根資源調査

### 調査日程

7月16日早朝魚釣島西岸着、母船ぐるくん（143ト、1600PS）は水深17m投錨。直ちに調査機材、キャンプ資材を陸揚する。午後から深夜まで魚類、サンゴ、イセエビ、海藻班に別れ、夫々調査を実施する。沖合に海上保安庁巡視船が漂泊。

17日06:00急流のため母船ぐるくんのアンカーが引きずられる。午前、午後とも各班調査を実施する。イセエビ班は夜間の潜水調査を行う。

18日09:00、19°N、128°Eで熱帯低気圧996mb・・・、16:00熱帯低気圧は21°N、128°Eで990mb、最大風速25mの台風8号となる。

尖閣諸島からはるか南約450km、進路WNWあり、風波は表面は比較的穏やかに見えたが、朝から大きな強いうねりが押し寄せていた。急流を観察。母船ぐるくんの船長判断を優先し、魚釣島現地調査を断念、陸上キャンプ撤去、刺網エビ籠等の漁具を引き揚げた。

底生動物班は、午前中魚釣島南側沿岸のボートにより状況観察するも調査予定地点に接近困難と母船に戻る。

夕刻、出発のためアンカーを巻き上げに入るが、2つの錨がからみ合い、非常事態になる。横井謙典潜水士らの潜水作業により、ようやく抜錨に成功した。直ぐに石垣に向け進路をとる。帰路の船中で山里清先生が、あと半日現地調査は可能ではなかったか、午前中に調査断念したことに強い不満のご様子でフィールドワークをモットーとする海洋学者の一面を見る思いであった。しかし調査団長の西島信昇先生は、船の航行の安全と大勢の調査団の皆さんの安全確保のために、海の経験が深く気象海象に詳しく海の恐ろしさを良く知っている船長の判断に従うのは当然であると毅然とした態度であつた。夜間大時化となる。

母船ぐるくんは大きなピッチングとローリングで大揺れであった。

尖閣諸島海域は現在でも、国際政治、領土権紛争の嵐が吹き荒れている。しかし自然の嵐、台風程恐ろしく人間は抵抗のすべもない。避難するしか術はない。琉球大学の磯根資源学術調査団もあきらめ切り上げるしかなかったのである。19日01:00母船ぐるくんは石垣港に到着した。

### 調査内容

本報告の全文は、尖閣諸島周辺漁場調査報告書（昭和57年3月沖縄県農林水産部 P7～88）に報告されている。①魚類調査班、②サンゴ類調査班、③海藻類調査班、④イセエビ等調査班の夫々について論文としてまとめられている。かなりのボリュームもあり、専門的になるので、詳細を知りたい方は、同報告書を参照下さい。

魚釣島で調査活動していた磯根資源調査団には、沖縄タイムズ社、琉球新報社など報道機関から11名が同行し、調査を分かりやすくレポートしてくれているので、ここでは、これらの新聞報道をもとに各班の調査を紹介する。

なお、引用した新聞記事は一覧表にして巻末に掲載しました。

### 古賀屋敷跡に キャンプ設営

「キャンプは、尖閣の開発者・古賀辰四郎が大正中期まで海鳥ふん、羽毛採取、カツオ漁業をやっていたという、いまや廃墟になった屋敷跡に設営。ガジュマルにおおわれた泉の水は豊富で冷たく、調査団の助けになった。調査団は16日夜明けとともに上陸、午後から底刺し網、エビかご、潜水などにより魚類やイセエビのサンプリング、生息状況の観察をはじめ、藻類やサンゴの生えぐあい、種類などを調査し、多くのサンプルを手に入れた。刺し網にはサメがそのつどかかり、サメの多い海を印象づけた。」(沖縄タイムス・7.20・「資源量は豊富・・・」)



調査団が本部を設営したかつての鰹節工場跡、岩盤を切り開いた船着き場の掘割が見える。(琉球新報 1981.7.25)

### 尖閣の海 資源豊富

「磯根資源調査は魚釣島の東西南北、4 点にポイントを定めたが、今回は台風接近で東、南の2 地点は調査できなかった。しかし、結果は①魚類調査は時速 3 ノットという速い潮流、月夜という条件下ではあったがサメ、メジナなどがかかり、『本島より資源的に豊富』(西島助教授) ②無せき椎動物は造礁サンゴにしぼって調べた結果、水深 10 メートルのところは 60%~80%の海底はサンゴにおおわれ『魚類のすみかとしてはあまり役立っていないが、地形の形成に役立っている』(山里教授) ③藻類は小型、糸状藻類が多く『密度は非常に高い、藻食性動物との関連を調べる必要がある』(香村教授) と報告され、④エビ、カニ類はカゴによる捕獲を試みた結果、5 平方メートルから 10 匹もとれ、高密度である。『小型で成熟が早く、卵を持っているものが 70%を占めていた』一などを明らかにした。」(琉球新報・7.20・「尖閣の海 資源豊富・・・」)



尖閣諸島の近海でエビカゴを船に引き上げ、資源調査をする県の調査団。(琉球新報 1981.7.20)

## ①、尖閣諸島 磯根漁場の環境特性と漁業資源

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 西島信昇、諸喜田茂充

沖縄水試八重山支場： 大城信弘、渡辺利明

### 魚群に驚く まるで養殖場！ 昼夜で一変する魚種

「水深 2 百メートルの等深線にそって黒潮はゆるい曲線を描いて北上し、尖閣周辺の潮目は魚種、魚群の濃密さで知られるところだ。・・・実際、あの岩場から見た魚群にはおどろいた。海面を波立たせ押し寄せて来る。同行の広報課カメラマン・伊波さんが『まるで養殖場ではないか』と声をあげた。魚群は海中でも同じであった。調査船『ぐるくん』の専用ダイバー・横井謙典さんは、テンジクイサギやハタ類、ダツ、ハマグロモンガラなどの大群に出会い、作業中、20 数種類の魚種、魚群を観察している。サメも多い。(琉球新報・7.25・「尖閣の海(4) 険しい自然 山中は深い原生林」)



テンジクイサギの群れ。魚釣島の魚群は大形で、イサキのほかにアジなどが多い。調査船「ぐるくん」ダイバー横井謙典氏撮影 (琉球新報 1981.7.22)

「尖閣のカワハギの魚影たるや、すさまじく濃い・・・夕方、船に帰ると、報道関係者のほとんどがわれ先にさおを入れる。心を躍らせて釣り上げればカワハギ、またカワハギといった調子。底には黒い魚の群れが右往左往している。・・・太陽が水平線に吸い込まれる時刻から、釣魚の種類は一変し、多様化する。“夜勤部隊”の到来だ。ハンゴミーバイ、イトウダイ、アカナ、ミミジャー(ヒメフエダイ)が主役だ。(沖縄タイムス・7.26・「尖閣の自然(5) 昼夜で一変する魚種」)

### 草食性のメジナも

#### 豊富な藻類が育む

「魚類グループはさし網を張る。この作業をポイントを変えて2日間行った。ベテランぞろいとはいえ流れの速さ、海底の急激な傾斜、荒波の中での作業は重労働であり、危険きわまりない。ましてやサメのウロウロするところだ。作業は3日目、台風8号の接近で打ち切られたが、16,17日の両日、風波は強いものの快晴に恵まれてほぼ計画どおりの成果をあげた。(琉球新報・7.22・「尖閣の海(1) 豊かな資源を確認」)



魚釣島の岩場にある唯一の人工水路を利用して活動する調査隊。(沖縄タイムス 1981.7.21)

「セットした底刺し網(長さ 27メートル)2枚を朝、引き揚げる。初回はその1枚に、サメ3匹とシチュー2匹、他の1枚にはハリセンボン1匹と4和半程度のクロダイ(チヌとは別物)に似たものが1匹、計7匹。・・・2匹のシチューはメジナの仲間である。・・・メジナは主に草食性。・・・潮間帯の磯に小型の糸状紅藻類が・・・密度100%と豊富であり、香村教授は『資源的にいうと、(藻類は)一次生産者としての働きが大きい』と評価した。それと、草食性のメジナが2匹も網にかかったこととは、符号するようだ。(前掲・「尖閣の自然(5)」

「魚類グループの西島助教授は『さし網は魚種と分布量を調べたが、サメに網を倒されたりしてうまくいかなかった。月夜だったこともよくない』と報告したが・・・このさし網漁獲調査では、まず①流れが速いため設置する場所が限定される。②サメがウヨウヨして網が倒されたり、破られる。③条件は悪いが、それでもテンジクイサギがよくかかった。資源量は本島海域に比べて比較にならないほど多い、と判断できる。・・・資源量掌握の手がかりはあった、とみていいだろう。」(琉球新報・7.22・「尖閣の海(1) 豊かな資源を確認」)



刺し網に掛ったサメ類。サメが来なければ夜行性の漁獲は増えていたか。(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

## ②、魚釣島のサンゴ群集

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 山里清、酒井一彦  
沖縄水試：島袋新功

### 潮流速く サンゴ浅場がない 水深2,3以深だと豊富 種類も多い

「尖閣は、台湾の東海岸を北上した黒潮が北東に向きをかえるところであるため・・・潮の流れは海岸に近い、水深20メートル足らずのところでもかなり速い。潜って海底のサンゴなど調べた調査隊は、3ノットぐらいのスピードだという。・・・サンゴ班の調査に参加し、“潜水取材”をした報道関係者の一人は、『ものすごい潮流だ。命綱をはなすと、こわい。大きな魚がギリギリ舞っていた』と真顔でいっていた。サンゴ関係の調査は、『20メートル水深だと流れが速くて無理なので、10メートル段階でやった』と琉大理学部山里清教授はいっている。同教授によると、造礁サンゴの生育状況は水深2～3メートルと、それ以上の深さでは対照的。

浅い所は種類も個体数も少なく、2～3メートル以浅深では豊富で、海底の60%～80%が覆われているが、大きいのは少ない。浅い所でサンゴが小さいのは、生まれ変わりが著しいため、波の荒さを反映して浅場のサンゴは、すべてはいつくばっている。深場では、いくぶん



枝状になっているが、魚類の『かくれ場所としては大きな役割をはたしていない』とも述べている。」(沖縄タイムス・7.24・「尖閣の自然 (4) 潮流の速さに驚く」)

### 海底 60%~80%だと 魚釣島磯根 ほぼサンゴでおおわれる！

「今回の調査地点は、島の東西南北、4点を設定したが西側と北側の2カ所しかできなかった・・・水深10メートルやや岸に寄ったところで造礁サンゴの活発な生育がみられる。個体も大きく数量も多い。方形わくをセットすると60%~80%がサンゴでおおわれ、ほとんど群生状況・・・サンゴ相は青サンゴが多く、与那国の海に似かっている。『ソフトコーラルをたくさんつけているのが普通だが、今回はみられなかった。島全体として同じ状況ではないか』と山里教授は推定した。ところで、方形わくでとらえたサンゴの生育状況が60%~80%というのは魚釣島の磯根がほぼサンゴ礁でおおいつくされている、とみていいかも知れない。山里教授は『魚のすみ家としてよりも、これは地形をつくっていくうえで重要な意味をもっている』と話す。尖閣の強烈な海底に育つサンゴのたくましさは、尖閣そのものかも知れない」(琉球新報・7.23・「尖閣の海 (2) 荒磯とサンゴ 沿岸地形をつくる」)

海底2~3メートルでは  
サンゴはない。  
水深10メートルほどに  
生育が見られる。

(「尖閣諸島周辺漁場調査  
報告書」より)



海底に方形わくを  
設置して  
サンゴの種類と  
生育状況を調べる。  
(同上)

### ③、尖閣諸島 魚釣島の海藻類とその生育状況

調査員 琉球大学熱帯海洋学科センター：香村真徳

沖縄水試：当真武 同八重山支場：勝俣 亜生

#### 外リーフのない荒磯 小型藻類

##### 糸状藻類が多い

「魚釣島は外リーフのない荒磯になっているので、干満による潮の移動差があまり目立たない。潮間帯（満潮線と干潮線の間を占める地帯）の幅が狭いわけである。潮がひくと岩場の斜面に赤いじゅうたんのような帯状の藻場が現れた。・・藻類班は、50センチ四方の糸で小さい目をつけた“方形わく”（コードラード）と呼ばれる測定器を岩に当て、海藻の種類ごとの生えぐあい（密度）を記録したり、生育状況を調査している。・・主なねらいは、海藻資源と草食性動物との関係をさぐるうというものである。斜面が赤い色をしているのは、紅藻類がびっしり生えているからである。『波の抵抗が大きいので、小型の藻類が多い。密度はほぼ100%』と香村助教授は説明する。ハテングサが最も豊富に生育し、次にジュズモなど細かい糸状藻類などが多いといった特徴がみられる。・・潮間帯のスロープの傾斜度は15度～20度、幅は約10メートル。斜面には、波の浸食作用でできた壺状の小さなタイドプール（甌穴）がたくさんあり、月面のクレーターを想起させる。プールには大型の海藻であるホンダワラが2,3カ所で見られたが、量的には少ない感じ。普通、潮干帯の上の方にはアナアオサが顕著にあらわれるが、ここではそのベルト状がない。（沖縄タイムス・7.23・「尖閣の自然（3）海藻密生 じゅうたん状に」）



波打ち際の岩場で藻類の採集調査、小型で糸状の藻が多い。魚の格好のエサ場である。（琉球新報 1981.7.25）

#### 豊富な藻類 磯資源を育む

##### 人間食用の藻 ない

「人間が利用する藻類、草類は尖閣にはほとんどみられない。これは季節外はずれだったからというだけではないようだ。・・香村さんは『小型、糸状藻が密生している。これが大きな特徴です』と話す。サンプルを60種類、数量にして100近く採集した。『藻食動物との関係を直ちにみたかったが、それは調べられなかった。既存資料と照合して検討したい』という。荒く、その



甌穴で、草食性の動物資源に重要な役割を果たす海藻を調べる調査隊。（沖縄タイムス 1981.7.23）

ために潮間帯がせまく、ベルトの特長はアオサがないこと、ハイテングサ、糸状藻類、石灰藻類の順に多く生育している。香村さんは『藻類が豊富なことが魚釣島の磯資源を豊かにしている』と話していた。」(琉球新報・7.24・「尖閣の海 (3) 豊富な藻類が資源を育む」)

#### ④、尖閣諸島産 シマイセエビの漁業生物学的研究

調査員 琉球大学理学部海洋学科： 西島信昇、諸喜田茂充

沖縄水試：当真武 同八重山支場：大城信弘、渡辺利明

#### イセエビ 捕獲カゴは 空振り 期待はずれ

「報道関係者が調査の中で最も関心を寄せた 1 つは、イセエビの捕獲カゴである。エビカゴは全部で 5 個、記者たちが期待を込めて見守るなかを沖合投入のカゴを積んだボートが出ていく。4 個は深さ 10~20 メートルにセットし、残り 1 個はクレーター状の“壺”が点在する例の藻場近くのタイドプールに翌 17 日の午前。沈めた 4 つのカゴは見事空振りで、残るはタイドプールのものでカゴに入っていたのはシマエビの小さいのが 1 尾である。調査隊長の西島助教授は首をかしげ『期待はずれだね。年変動が大きいようだ』。一昨年 5 月の学術調査(沖縄開発庁尖閣諸島総合調査の意)に参加した経験のある同教授は『前回とは大きな違いがある』といぶかしそうにつぶやく。」(沖縄タイムス・7.27・「尖閣の自然 (6) イセエビは空振り」)



1979 年沖縄開発庁尖閣諸島総合調査の際、イセエビが多数捕獲された。  
(白石・荒井 1979)

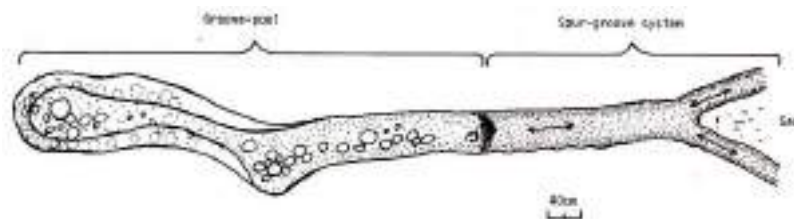
今回は期待されながらも  
成績不振に終わった  
エビカゴによる  
捕獲調査。  
(沖縄タイムス 1981.7.27)



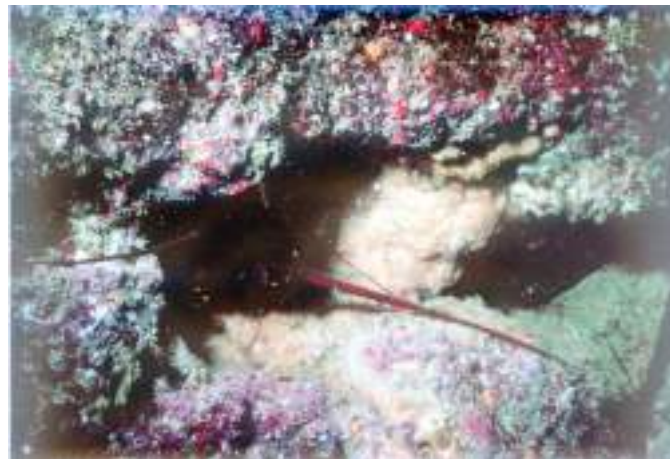


### 1坪半に 10尾確認 エビの好漁場 数量的にも 豊富

「もぐり調査ではわずか5平方メートル、1坪半程度のところに10尾ものイセエビを確認した。採集して調べたら10尾中7尾は卵をかかえていた。小型だが、早熟というのが特徴。しかし、以前の調査ではかなり大型だったこともあって『大型は捕られてしまったのではなか』との声も。『カゴでは期待したようにはいかなかったが、集中的にいる場所があるようだ』と・・・数量的にも豊富であることがほぼ確実視され、『その集中する場所がどのような場所かを漁場全体として掌握する必要がある』と述べている。」(琉球新報・7.24・「尖閣の海(3)エビの好漁場」)



シマイセエビの生息していた縁溝プールの平面図



縁溝凹地プール内の外間イセエビ・396 cm立方内の穴に5尾も入っていた。(「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より)

(丁)

## 引用した地元新聞報道記事一覧

### 経緯と調査結果の報道

1981.2.03・沖縄タイムス・「尖閣に調査団派遣 西銘知事意向 漁業基地の可能性検討」
1981.6.27・沖縄タイムス・「尖閣諸島で漁場調査 来月 11 日から知事先頭に」
1981.7.08・沖縄タイムス・「県 尖閣周辺の資源開発へ 11 日から 50 人の調査団 磯根、漁業中心に 3 年間にわたって実施 知事視察は見送り」
1981.7.08・琉球新報・「尖閣諸島 11 日から漁場調査 外務省 慎重配慮を望む」
1981.7.14・沖縄タイムス・世事批評「アングル 尖閣諸島の波高し！」
1981.7.20・沖縄タイムス・「資源量は豊富 数々のサンプル採集 イセエビ密魚の疑いも 魚釣島の磯にメス」
1981.7.20・琉球新報・「尖閣の海 資源豊富 県の漁場調査終わる」
1981.7.23・琉球新報・「沖縄の漁業調査非難 中国外務省が『尖閣』で談話」
1981.8.16・琉球新報・「尖閣周辺 魚群分布が薄い 漁場は期待はずれ 県『調査が不十分』来年以降にも再調査」

### 琉球新報社の掲載同行記 「漁場調査に同行して」①～④

1981.7.22・琉球新報・「①豊かな資源を確認 調査の条件は悪かったが エビ籠設置 急流に調査難行」
1981.7.23・琉球新報・「②荒磯とサンゴ 沿岸地形をつくる 大きくて数量も多い」
1981.7.24・琉球新報・「③エビの好漁場 かが漁はかなり有望 豊富な藻類が資源育くむ」
1981.7.25・琉球新報・「④険しい自然 山中は深い原生林 ツタ、カズラからみつく」
1981.7.25・琉球新報・写真特集「カメラで探る 尖閣の“海の幸”」

### 沖縄タイムスの掲載同行記 「尖閣の自然 資源調査に同行して」①～⑦

1981.7.20・沖縄タイムス・写真特集「魚釣島の磯にメス」
1981.7.21・沖縄タイムス・「①きつ立する奇岩の島」
1981.7.22・沖縄タイムス・「②ヤギの繁殖に懸念 山火事の跡、右翼のプレハブ小屋」
1981.7.23・沖縄タイムス・「③海藻蜜生 じゅうたん状に・・・種類も豊富」
1981.7.24・沖縄タイムス・「④潮琉の速さに驚く」
1981.7.25・沖縄タイムス・「⑤昼夜で一変する魚種」
1981.7.27・沖縄タイムス・「⑥イセエビは空振り」
1981.7.28・沖縄タイムス・「⑦“油田”絡み 開発多難」



※参考資料

尖閣諸島関係の報告一覧表

尖閣諸島海域において、これまでに水産試験場が調査し、その結果を事業報告書にまとめたものの一覧表である。

- | ① 報告名             | ② 報告書年度  | ③ 使用船舶    | ④ 調査員                      | ⑤ 調査月日                               | ⑥ 調査概要   |
|-------------------|----------|-----------|----------------------------|--------------------------------------|--|
| 1. ① 琉球近海共同調査概報   | ② 1958年度 | ③ 俊置丸     | ④ 大鶴典生、城田得位、当真嗣誠、知念正男、金城武雄 | ⑤ 3月19日～23日                          | ⑥ 尖閣付近の水温測定及び26°45'N、125°18'E付近の産魚一本釣的獲試験                  |
| 2. ① 深海一本釣漁業試験    | ② 1959年度 | ③ 漁集丸(用船) | ④ 調査人不明                    | ⑤ 4月11日～17日、4月25日～26日                | ⑥ 黄尾鯛及び魚釣島近海における釣獲試験                                       |
| 3. ① 深海一本釣漁業試験    | ② 1960年度 | ③ 八祥丸(用船) | ④ 当真・奥平                    | ⑤ 1月17日～1月26日、2月24日～3月7日、3月17日～3月31日 | ⑥ 魚釣島及び赤尾鯛近海における釣獲試験                                       |
| 4. ① 第二次一本釣魚場調査   | ② 1962年度 | ③ 図南丸     | ④ 城田・得位・上地清古               | ⑤ 5月7日～8日                            | ⑥ 魚釣島近海での釣獲試験  |
| 5. ① 近海一本釣漁業試験    | ② 1962年度 | ③ 図南丸     | ④ 城田・得位・上地清古・奥平盛光          | ⑤ 2月21日～3月2日                         | ⑥ 赤尾鯛、魚釣島、南小島近海における釣獲試験                                    |
| 6. ① サバ及びタイ魚場調査   | ② 1963年度 | ③ 図南丸     | ④ 上地・新垣                    | ⑤ 12月17日～26日                         | ⑥ 尖閣周辺海域における浮魚の魚探調査及びはね釣試験並びに魚釣島・南小島、赤尾鯛、近海の本釣的試験、その他海洋観測。 |
| 7. ① 深海一本釣魚場調査    | ② 1963年度 | ③ 図南丸     | ④ 当真嗣誠                     | ⑤ 6月20日～22日                          | ⑥ 魚釣島及び赤尾鯛近海における釣獲試験                                       |
| 8. ① サバ魚場調査及び海洋調査 | ② 1964年度 | ③ 図南丸     | ④ 城田・当真・新垣                 | ⑤ 4月7日～16日                           |  |

- ⑥ 魚釣島西方（農林海区 539）における漁探記録及び一釣獲試験
9. ① 深海一本釣漁場調査      ② 1964年度      ③ 図南丸  
 ④ 新垣盛敬      ⑤ 8月5日～8日  
 ⑥ 赤尾嶼近海における釣獲試験
10. ① 深海一本釣漁場調査      ② 1965年度      ③ 図南丸  
 ④ 上地清吉      ⑤ 12月20日～12月23日  
 ⑥ 魚釣島及び赤尾嶼近海での釣獲試験
11. ① 海洋観測並びに一本釣漁場調査      ② 1966年度      ③ 図南丸  
 ④ 当真綱誠      ⑤ 6月16日～6月30日  
 ⑥ 久米島～魚釣島の西方の黒潮横断観測及び魚釣島西方における一本釣獲試験
12. ① 深海1本釣漁場調査      ② 1967年度      ③ 図南丸  
 ④ 城田・得位・久貝一成      ⑤ 1月24日～2月2日  
 ⑥ 赤尾嶼及び魚釣島近海での釣獲試験
13. ① 1本釣漁場調査      ② 1969年度      ③ 図南丸  
 ④ 調査員不明      ⑤ 11月8日～12月7日  
 ⑥ 赤尾嶼及び魚釣島近海での釣獲試験
14. ① 尖閣諸島周辺の海洋観測及び漁場調査      ② 1971年度      ③ 図南丸  
 ④ 兼浜安信・金城武光      ⑤ 3月29日～4月10日  
 ⑥ 魚釣島近海での海洋観測及び一本釣獲試験（琉球大学との共同調査）
15. ① 底魚、浮魚漁場調査      ② 昭和50年度      ③ 図南丸  
 ④ 久貝一成      ⑤ 8月30日～9月9日  
 ⑥ 赤尾嶼、黄尾嶼、魚釣島近海における一本釣又は底立縄又は流し刺網による漁獲試験

なお、本参考資料は、「尖閣諸島周辺漁場調査報告書」より転載しました。

## ※参考資料

### 尖閣諸島における安全操業施設の設置要請の経緯

尖閣諸島に緊急避難港を設置せよとの要求は、1978年、尖閣を守る漁民大会で“尖閣諸島に緊急避難施設も早急に設置することが決議された。のちに開催された漁場調整会議の席でも、危険防止として漁船係留ブイ設置してほしい旨が要望された。

尖閣諸島で操業する漁民にとって、これら安全操業施設は不可欠であり、前々から、琉球政府もしくは日本政府に対して設置方を要請していた。参考資料として、新聞資料及び聞き取りからこれまでの経緯と漁民の思いを紹介したい。(編集部)

#### 1、避難港の設置、1950代から漁民の悲願だった

1、1952年4月、琉球大学調査団の団長(高良鉄夫)は、漁業施設の必要性を帰任報告で提言、「同島を基点とする冬期の水産業は世界的価値を有する。即ちカジキ、鰹、フカ、イルカなどの漁獲、日本、台湾から冷凍船が進出している点から見た時冬期の水産は世界的漁場として最も有望で、そのためには同島で給水設備、船溜り場、冬期の無線設備が是非必要である」。(1952.4.29・沖縄タイムス・「尖閣列島学術調査団帰る」)

2、1957年6月、宮古漁協による「魚釣島への漁港設置に関する請願 1957.6.22」(琉球立法院)。宮古漁業協同組合代表 天久恵秀他二名、第10回、琉球立法院定例42号(1957.9.27)公報(号外)」

3、1968年8月、日本政府沖縄委員(高岡大輔)は、尖閣視察報告で港湾施設等を提言。「・・・魚釣島と南小島に漁港と避難港を兼ねた港湾施設をする必要がある。これは尖閣列島一帯の経済開発には必須の条件である」。(「尖閣列島一帯の視察報告要旨」高岡大輔、1968.8)

4、1969年8月、総理府派遣の尖閣列島海域調査団(東海大学新野弘団長)は「・・・この一帯は揚子江から流れる冷たい水と黒潮がぶつかり合うため・・・良い漁場となっている。去年はカツオやタイが豊富にとれたが、こしはサバの豊漁である。したがって常時漁場調査を行ない、尖閣列島に漁港をつくれれば一大漁場になると思われる。」((1969.8.30・琉球新報・「尖閣列島調査団の報告書」)

#### 2、1978年の漁民大会、漁場調整会議で、“安全操業施設設置”再浮上。

1972年復帰前後において、地元沖縄側から、日本政府に対して、灯台、無人気象観測施設、安全操業施設の設置要請がなされたが、復帰準備のどさくさでウヤムヤとなっていた。

中国武装漁船の領海侵犯事件を契機に、また政府へ設置要請がなされた。

1978.4.13・琉球新報・「“尖閣列島付近は領海”中国大船団、字幕掲げ強行採決 巡視船の命令無視 半数は機銃で武装」

1978.4.18・琉球新報・「“避難港の設置を”野島副知事 国への要請に上京」

1978.4.19・琉球新報・「尖閣諸島に漁業施設建設へ 県、近く調査開始 当面緊急避難港を検討 水揚げ量の拡大図る」・建設場所選定、潮流、気象条件等調査を始めたい。
1978.4.21・沖縄タイムス・「領海侵犯に怒り爆発 漁民大会 漁民の死活問題 “計り知れない経済、精神的損失” 漁場確保強く訴える 尖閣諸島 きょう代表団を派遣」 ・漁民大会で“尖閣諸島に緊急避難施設も早急に設置すること！”決議される。
1978.4.21・沖縄タイムス・「避難港築港に難色 尖閣諸島 海洋条件悪く困難 政府事務レベル」・園田外相の外交上の立場から避難港早期建設の反対表明に対して、恩田水産庁次長も、尖閣諸島は海洋条件が非常に悪く、築港工事は、予想以上に困難と思われる、各方面からの徹底した事前調査が必要で、その結果をみて態度を決めるとしている。
1978.4.21・八重山毎日・「尖閣の避難港修復へ 安部長官が実効支配で」・新たな避難港建設は戦略的に考えなければならないが、尖閣諸島には戦前沖縄県人が住み、避難港(掘割の意)があった。県側の申し入れもあり、これを修復したいと表明。
1978.4.25・沖縄タイムス・「尖閣諸島に施設を建設 各省庁 県議会折衝団に回答」・時期的問題はあがるが、施設(避難港、ヘリポート等)を設けるべき点で一致した意見である。
1978.4.27・八重山毎日・「尖閣諸島に避難港を 県漁連が政府に申し入れる」・安倍長官は沖縄県からの要請があれば、前向きに設置に取り組むことを明らかにした。
1978.4.29・沖縄タイムス・「尖閣避難港建設得策でない 外相が否定的見解」・我が国は尖閣諸島を有効に支配しており、こちらから火種をつけるようなことは得策でない。外相答弁は安部長官との姿勢の食い違いを浮き彫りにしていると報じている。
1978.11.25・沖縄県農林水産部漁場利用調整対策会議の席で「伊良部漁協から避難港が無理であれば、ぜひ係留ブイを設置してほしい」旨の要望が出る。

### 3、1979年沖縄開発庁、基礎調査を実施 技術的観点から 設置無理と発表

1979年5月末、沖縄開発庁は、尖閣諸島蔵合調査(学術及利用開発可能性調査)を実施。避難港、漁船避難用係留ブイについて設置建設の基礎調査を行った。

1979.5.23・琉球新報・「今月末に調査団派遣 尖閣諸島、学者らを中心に 地質、気象などに主眼 沖縄開発庁 西銘知事 避難港建設が妥当」
1979.5.28・沖縄タイムス・「尖閣諸島 本格調査開始 機材など陸揚げ さっそくテント設営」
1979.5.30・沖縄タイムス・「尖閣 いっせいに本調査 標本採集・ボーリングなど」
1979.6.01・沖縄タイムス・「尖閣の学術調査 日程短縮 三原長官が指示 日中関係を配慮」
1979.6.02・琉球新報・「揺れる尖閣調査団 一現地に同行して 終始政治がらみ 日程短縮 学者、連日 調査に大忙し」
1979.6.07・沖縄タイムス・「成果あげた『尖閣学術調査』 標本千点持ち帰る 池原教授ら けさ石垣に到着」
1979.12.18・沖縄タイムス・「尖閣諸島 避難港設置は無理 小淵総務長官、調査結果を発表」



魚釣島西避難港(漁港)候補地      南北小島間避難港(漁港)及び漁船避難用係留浮標設置水域  
( 沖縄開発庁「尖閣諸島利用開発可能性調査編」 1979年(昭和50)年10月)より

「・・・地元が強く求めていた避難港(漁港)の建設は、沖縄開発庁の基礎調査で殆んど不可能に近いことが判明した。しかし灯台、ヘリポート、無人観測施設などについては気象条件が良ければ機動力を動員して設置できるとしている。・・・台風や台湾坊主などの異常気象で漁船が避難できる避難港や漁船避難用係留浮標の建設・設置が必要だが、同諸島は、遠浅の水域がなく、しかも十二～十七メートルの高波に達するため、避難港建設は技術的にみて不可能に近い。また、漁船避難用係留浮標についても強い風波の影響で、漁船や乗組員に危険をおよぼすので設置は適当でない、と結論を出した」(1979.12.18・沖縄タイムス・「尖閣諸島 避難港設置は無理」)、このようなことから、設置は見送られた。

#### 4、漁民の思い、今なお強し、大規模でなく、すぐにできる小さな船着場を

2010年、避難港について、漁協に聞き取りした。今なお設置の要望は強い。

「避難港を作る場合は是非とも漁業者の意見を聞いてほしい。大きい港を作るとなると多分相当時間がかかるし、建設できるかもどうかもわからない。与那国漁港の避難港、あれ位の規模でもいいと思う。私たちの使えるサイズでいいから早く作ってほしい」(与那国漁協・中島組合長) / 「先島からの出漁では日帰り操業できない為、悪天候に備える為にも」(宮古島漁協・小禄組合長) / 「天気が悪いとき避難港があれば助かる。尖閣ではアンカーを沖の方に下ろしていても、潮の流れが早くなると船が流されて座礁してしまう、それで船を沈めた事故が過去に何度もあって、伊良部町時代に、避難港の要請を決議した」(伊良部漁協・友利組合長) / 「避難港ができたなら最高、小さな船でも行けるようになる。昔は3トンの船でも行っていたから」(池間漁協・濱川組合長) / 「避難港があれば本当に助かる。夜に着いて休んで、早朝から操業できるし、急に天気が荒れたらすぐ避難できる。小型船でも行けるようになる」(与那国漁協・中島組合長)。

(「尖閣研究 尖閣諸島の自然・開発利用の歴史と情報に関する調査報告平成22年度」より)



※「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

—沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査— 2017年」(2018年刊)

「I章 尖閣諸島海域における漁業」より転載しました。